山びこ通信

Disce libens.

2011 秋

山の学校 クラス紹介

ホームページ http://www.kitashirakawa.jp/yama.html　ウェブログ http://www.kitashirakawa.jp/yama/
電話 781-3215 / FAX 781-6073　電子メール taro@kitashirakawa.jp

楽しく学べ——Disce Libens.

文・山下太郎

ディスケ・リベンス。もとはアウソニウスが手紙に書いた言葉で、短く印象的なのでその後格言として知られるように。訳語だけを見ればセネカの「楽しむことを学べ」と似ているが、こちらは「同じ学ぶなら楽しく学べ」ということで、「真の喜びは何か」といった哲学的問いとは無関係である。

本来学ぶことは文句なしに楽しい。赤ん坊や幼児を見ればそれは一目瞭然である。その楽しさはひとことで言うと挑戦する楽しさ。自分で「よし、やろう」と決めたことに挑戦し試行錯誤するのが本当の学びである（人は失敗から学ぶ）。

子どもはダメと言われたことを何度もする、と大人はこぼすが、子どもは誰もがチャレンジ精神いっぱいである。それがいつのまにか「やれと言われたことしかしない」、そう言って大人はまた嘆くのである。「ダメ」とか「こうしなさい」という言葉がそう導いた可能性も大である。といって、子どものすることを１００%放任するのが答えでもなし。

そこで表題の言葉の出番である。子どもの学びをどうする？ と考える前に大人は自分の学びをどうする？ と考えるべきではないだろうか。子どもは模倣の天才で、大人の真似をして育つ。であれば、大人こそおおいに「楽しんで学ぶ」べし。子どもはそんな大人の姿勢に感化を受け、過干渉からも解放されて…。一石二鳥だと思われる。

今の日本、「楽しく」という言葉は誤解されやすい。とかく「楽しむ」と言うと安易に聞こえるようだが、事実は逆で、それはTVやゲーム等の「もてなし」による楽しみとは本質的に意味が異なる。学びの楽しさとは、楽をして学ぶことではけっしてない。汗をかいて自分の足で山道を登ること。これが学びの真の楽しさだ。「楽をして学ぶ」とは、車に乗って山頂を目指すことに違いない。退屈するのはどちらだろう。人生の思い出に残るのはどちらだろう。

自分で山道を登ること。そんな学びは何だろう。私からのアドバイスはただひとつ。「読もう」と決めた本（できれば古典）を最後まで読むことだと思う。読書法については様々なアイデアや議論を見聞きする。それは二千年前も同じことであった。ローマの政治家小プリーニウスは手紙の中で、「多読より精読が大切だと言われている」という意見を紹介している。

小プリーニウスは伯父の大プリーニウス（博物学者）を尊敬していた。知人にその読書法を尋ねられて、「彼は本を読むときは必ず抜書きをした。何に役にも立たないほどダメな本は一冊もないから、というのが口癖だった」と答えている。抜書きは、今でも通用する精読の王道だ。

一方、ローマの哲人セネカは旅を例に取り、あちこち旅を続ける人間は、各地に知人はできるが真の友人はできない、読書もあれこれ読み散らかすのではなく、少数の本と深い信頼関係を結ぶべきである、と述べている。これまた精読の勧めである。

セネカにとってじっくり付き合うことのできる本とは、すばり、古典と呼ばれる作品のことであった。そこではソクラテスと語り合うこともできる、と言っている。並み居る賢者たちはいつでも面会に応じてくれるばかりか、手ぶらで返すことはない、とも。

一冊の本をじっくり最後まで読み通す。学校教育では望めない。（山の学校を除き）どこの塾でもやっていない。学校ではそれこそ他人の作った「抜き書き」をランダムに読まされるだけだ。本の選択に迷ったら、黙って古典と呼ばれる作品を読むべし。１０代の頃にどれだけ古典にふれ、生涯の友と呼べる作品に出会えるか。読んで理解できなければ自分が悪い。素直にそう思えるのも古典を読めばこそ。赤線を引きながら何度でも登頂に挑戦すべき。山頂から見える景色の広がりは格別である。

以上、学びの楽しさについてふれ、その一例を紹介させていただいた。山の学校のモットー（校訓）は、このディスケ・リベンスであることも最後に記しておきたい。

（——山の学校代表・山下太郎）

冬学期・時間割（予定）

	午前（9:10–15:30）	1（16:20–17:20）	2（17:30–18:30）	3（18:40–20:00）	4（20:10–21:30）
月		つくる （16:30～18:00 隔週）	漢文入門 （17:10～18:30）	イタリア語講読	高校英語 ラテン語入門
火		しぜん A* かいが A* （*15:50～17:20 隔週） かず1～2年	ことば3～4年 A かず5年	中学ことば ギリシャ語入門 A	中1～2英語の基本 ギリシャ語初級講読
水		ことば1～2年 かず4年 A 経済学入門 （16:00～17:20）	ことば3～4年 B かず4年 B	かず6年 中3英語の基本	中学数学 歴史入門（高校） ラテン語初級講読 A
木	英語一般 （14:10～15:30） ラテン語初級講読 B （14:10～15:30）	しぜん B* かいが B* （*15:50～17:20 隔週） ことば6年	ウェブプログラミング入門 （17:10～18:30 隔週）	中学・高校英語 ギリシャ語入門 C	高校数学
金		ことば3～4年 C ことば5年	かず3年 A かず3年 B	ロボット工作（隔週） ユークリッド幾何（隔週） ギリシャ語中級講読	ラテン語初級講読 C ラテン語中級講読
土 日	ギリシャ語入門 B （土 14:00～17:00 隔週） フランス語講読 （日 9:10～12:00 隔週）				

開講可能クラスの紹介

＊他にもご希望のクラスがございましたら、お気軽にお問い合わせ下さい。

『高校・日本語の読み書き』

対象：高校生　講師：百木漠

小論文、小説、評論などの現代文を読みながら、その感想や意見を文章にまとめる練習をします。国語が好きな人でも嫌いな人でも歓迎します。必要に応じて、学校の勉強や入試の対策などにも対応していくつもりです。

『調査・研究入門』

対象：中学生以上　講師：浅野直樹

興味のあるテーマを自分で設定し、そのことについて調べ、まとめます。文献収集や構成などのお手伝いをします。意欲的な中高生、論文やレポートを抱えた大学生、調べたいことがある一般の方をお待ちしております。

『確率・統計の考え方』

対象：中学生以上　講師：浅野直樹

一般にデータから価値を汲み取ろうとする際には唯一の正解というものはありません。確率・統計に騙されず、正しく考えるための思考法の訓練を共にすることができればと思います。

『行列の意味』

対象：一般　講師：福西亮馬

線形代数をもう一度よく知りたいという社会人の方と一緒に、行列の固有値問題の意味を、代数的、幾何学的、解析的に「とことん」合点するまで深く味わいます。社会に出て縁遠くなったと思われがちな数学は、試験もない「今」だからこそ、じっくりと楽しめます！

『ラテン語初級文法』

対象：一般　講師：山下大吾

ラテン語文法の基礎を習得するクラスです。教科書として岩波書店刊『ラテン語初歩　改訂版』を用います。Festina lente「ゆっくり急げ」の精神で、豊かなラテン語の世界をご一緒に楽しみましょう。

『ロシア語講読』

対象：一般　講師：山下大吾

プーシキンなど 19 世紀ロシアの古典作家の作品を中心に、受講生と相談の上テクストを選択します。初めてロシア語を学ばれる、あるいは再挑戦される方々を対象にした入門コースも開設予定です。

『イタリア語入門』

対象：一般　講師：柱本元彦

中学レベルの英語力を前提にした＜ゼロから学ぶイタリア語＞です。講談社現代新書『はじめてのイタリア語』を一緒に解読しながら、楽しく（イタリア関係の雑談を交えながら）進めて行きたいと思います。

『フランス語入門』

対象：一般　講師：武田宙也

おもにフランス語にはじめてふれる方を対象として、初級文法をゆっくり、じっくり学んでいくクラスです。フランス語に少しでも興味をお持ちの方は、お気軽にご参加いただければと思います。

『聖書ギリシャ語入門』

対象：一般　講師：広川直幸

『新約聖書』および『七十人訳聖書』を原典で読みたい方を対象としたギリシャ語入門クラスです．教科書は，N. Clayton Croy, A Primer of Biblical Greek を使用します．

山の学校 会員募集中。

山の学校は、**小学生から大人**を対象とした新しい学びの場です。“Disce libens.（楽しく学べ）”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

学校法人 北白川学園 山の学校／北白川幼稚園
〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41

「かいが」 A・B　　担当　梁川健哲（けんてつ）　高木彬

● 写真から絵へ （水彩絵の具で）

これは、写真撮影を通し、構図への意識を高める課題「27 枚の絵を撮ろう」（山びこ通信 2011 春学期号に掲載）の続編として、春学期後半に行った課題です。各自が教室周辺で撮影した写真の中から気に入ったものを選び、それらをもとに絵を描きます。その際、撮影した場所に再び赴き、写真に写した空間を目の前にし、その雰囲気を感じながら、今度は自分の目と手によって、構図のスケッチや下書きをしてもらいました。カメラのシャッターで一瞬にして空間を平面に写し取る場合とは異なる感触をもつ絵画的体験、その面白さや難しさを、敢えて対比的に感じて欲しかったからです。このプロセスで、同時に構図の練り直しも行いました。「絵にしかできないことをしよう！」この合い言葉のもと、みんなのイマジネーションは、さらに膨らんでいくこととなります。（健）

・Aクラスでは、着彩までを、ほぼ全て屋外で制作しました。複数枚描いてくれた生徒もいますが、ここでは紙面の都合上その一部をお伝えします。（健）

Ｉちゃんの作品。絵では、花壇に咲くマリーゴールドにぐっと近寄っています。甘い香りまで伝わってくるようです。また、想像で登場させた猫が、新たな物語を生んでいます。

Ｈちゃんは、園庭南の木立を、手前にある竹垣が入らぬよう、そのすき間からカメラを構え、低い角度で切り取りました。写真よりも明るく穏やかな雰囲気が絵には出ています。彼女らしさそのものです。

Ｈ君も別の場所から同じ木立を眺めています。写真とは構図を変えました。撮影時は誰よりも 27 枚に時間を掛けていたこだわり派です。大胆に設けられた余白は、面白い奥行き感と軽快さを絵に与えています。

Ｓちゃんの構図は画面を上下に分かつ園庭の際から、ちらっと手すりが見え、向こう側への興味をそそります。丹念なスケッチと下書きをし、空は後日、着彩した日の曇り空をあえて再現することを選びました。

Ｍちゃんは、奥まった民家のアプローチを描きました。驚いたのは、そのひっそりとした薄暗さと、ほの明るい感じ、奥に進んでみたくなるようなワクワク感が、シンプルな構図と色置き換えられながら、しっかりと抽出されていることです。

・Ｂクラス

カメラは風景をきれいに切り取ります。しかしもちろん、そこにあってほしくないものまで写りますし、逆に、そこにあってほしいものまでは写りません。ところが絵画の特権は、そういうことが全部できるところにあります。切り取った風景を絵にしていく過程で、絵画のもつ可能性を実感すること、自分の想像力によってその風景を新しく構成しなおすことに取り組んだ様子をご覧下さい。（彬）

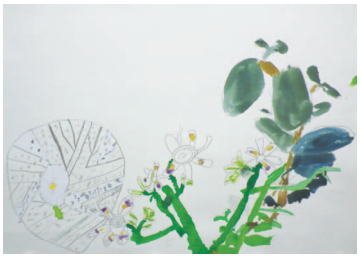
Ｒちゃんは、４つの写真を組みあわせて１つの風景を！（彬）どこまでも続くような奥行き。ふと、旅をする猫の物語を想像してしまいました。（健）

「風景は、きれいのも、こわいのもあるから、おもしろい」（Ｉちゃん）。彼女たちの絵には、そうした印象や感情も描き加えられました。（左：Ｉ作、右：Ｓ作）（彬）
また、そうしたもの全てが画面の中で溶け合っているところも素敵ですね。（健）

木々の向こうに園舎の時計台、その向こうに街という構図。空気の中に溶け出したような緑。時計台が、緑に包まれている感じが、写真以上に出ていますね！（健）

写真と現場のスケッチから画面を再構成するＴちゃんの気迫！（彬）
門のデザインが気に入ったという彼女。そうしたひとつの断片から、勢いよく空想が広がっていきます。（健）

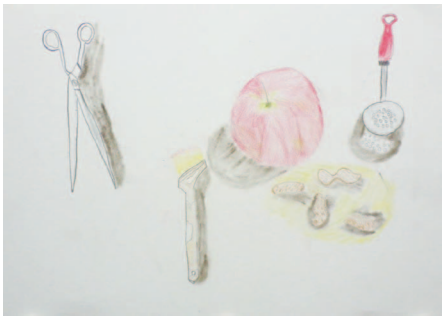
写真には写らない石の細かい表面まで描き込むＹ君。（彬）同じく不鮮明なシャガの花も、記憶を働かせてご覧の通り（右）。「猫の顔って難しいなあ…」と言いながらも一生懸命にその姿を紡ぎ出していたＫ君の力作（左）。そんな「難しさ」の中にこそ、描く事でしか味わえない楽しさがあります。（健）



● 静物画 （色鉛筆とパステルで）

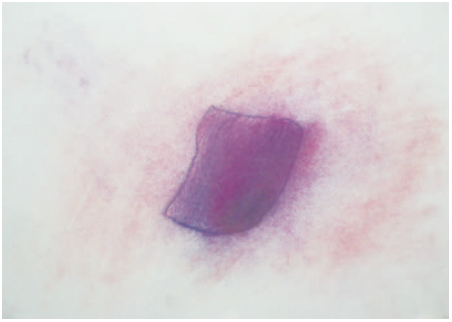
秋学期は静物画に取りくみました。春学期のカメラの課題では、モチーフをどのように切りとるか、いわば構図（フレーミング）の観点から、絵画の楽しさを体験してもらったのでした。それを引き継ぎながら、今回の静物画では、モチーフをどのように組みあわせるか、すなわち構成（コンポジション）の視点もふくめて、発想をひろげてもらうことをねらいとしました。何かと何かを組みあわせることが、たんに足し算をしただけではない一個の小さな世界を生むことになるという感覚。これは実は、カメラの課題を進めていくなかで、すでにみんなが知らずと実践してくれていたことでもありました。今回は、そのおもしろさにピントを合わせたのです。それは、モチーフ同士が織りなす世界に、情緒や、手触りや、空気感のようなものをあたえることでもあります。（彬）

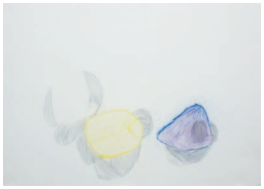
・Ａクラスの制作風景



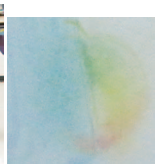
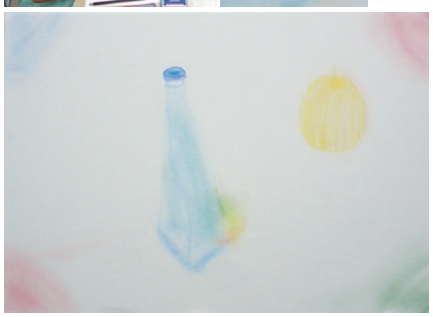
綿棒とパステルで丹念にやさしい影をつけていくＨ君。落ちる影が面白いので、穴の空いたオタマは手で浮かせて描きました。影で、物がここにある！という感じを出すこともできるのですね。

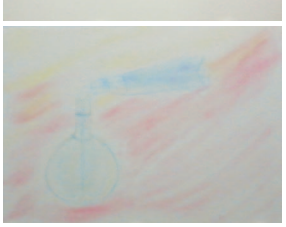
小さい透き通った３つの石を持ってきたＭちゃん。１枚目は「影が面白い！」とＳちゃんが言ってくれました。複数の光源が作る影の重なりに、「タッチの方向」が生きています。２枚目は一つの石を目一杯拡大して描きました。光を放っています！



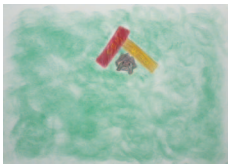
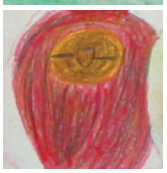


物の配置と独特のやわらかい表現が相まってドラマチックな情景を生みだしています。ガラスの瓶の透明感と温かみが素敵です。右下の絵では、水が注がれる場面にするため、流し台で水の流れを観察して目に焼き付けてから描きました。



▲ 瓶と二つのキャンドル

Ｓちゃんが長年可愛がってきたというウサギの風合いが表されています。小さな亀の置物を描く時は、亀の目線と同じ真横から見て描こうと、高い台の上に置いて描きました。琺瑯のポットや陶器の小瓶の色と表情にもご注目下さい。

Ｉちゃんが持ってきたのは何と鹿の角です。一本の角の中にある色・質感の変化をつぶさに観察し、画材とタッチを使い分けています！角は光っているかのようです。左上の絵は「色が綺麗！」とＨちゃんが指摘してくれました。物の組み合わせも構図も面白いですね！

ご覧のように、今回は「描きたいもの」を各自が持参し、教室で用意した様々なものとの組み合わせも自由に行いました。画材は色鉛筆とパステル（各 12 色）のみです。

「ここにない色のものは、どうすれば描けるでしょう？色を混ぜて作ることができるでしょうか？」12 色の色鉛筆を見せながらクラスの冒頭で訊ねると、「混ぜられない！」「混ぜられても、絵の具みたいにはきれいに混ぜられないと思う」と何人かが答えました。

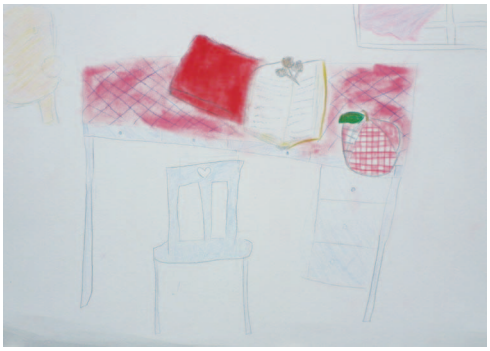
しかし、いかがでしょうか。色鉛筆の場合は「線の重ね方」の工夫次第で、パステルの場合は粉の配合や擦り方で、深みのある豊かな色や表情を表せることを皆さん自身が証明してくれました。

続いて、Ｂクラスの模様をご覧下さい。（健）

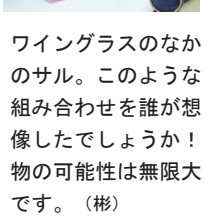
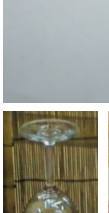
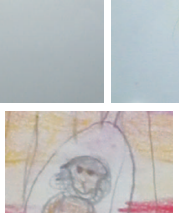
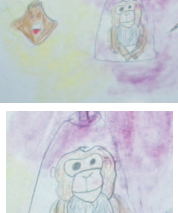
・Bクラスの制作風景

自宅から持ってきた大切なテディベア。毛の一本一本に心を込めて描きました。（彬）
小さな革表紙の本の、風合いと深みある色は、試し塗り用紙で実験し、何種類も色を重ねて作りました。（健）

Tちゃんは、一冊の本を手がかりに、まるで物語を紡ぐように、情景をありありと想像してくれました。（彬）
上の絵は、小さなくまのぬいぐるみから想起した物語。「迷子になって悲しんでいたところに妖精が来て…」（健）



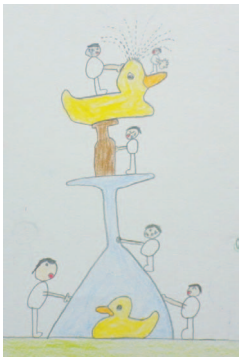
ワイングラスのなかのサル。このような組み合わせを誰が想像したでしょうか！物の可能性は無限大です。（彬）
１枚目（左）。先に敷物の色を塗って、上に置いた物の色が塗れなくなりました。消しゴムで消したあと、苦心して描ききりました。ワイングラスの奥に見える消し後、簾の透け感はむしろよい感じです。ただ、全体が画用紙の隅により、サルの部分も少し小さいようです。折角だから、より色鉛筆の線を生かせるように、大きく描いてみよう！ということで、２枚目に挑戦。今度はサルのふわふわした毛並みを描き込むことができました。背景の工夫としてパステルを勧めると、ぐんと絵の雰囲気が出て、Iちゃんはニッコリと満足気。お猿もニッコリと頬を赤らめています。紆余曲折を経て得られる発見こそが、何より大事です。頑張りましたね！彼女の例で示しましたが、この紙面全ての作品の背景にそうしたストーリーが横たわっていることを、是非ご想像頂きたいと思います。（健）

虫が大好きなＹ君。彼が創りあげた月夜の森の静かな世界は、大事にしているカブトムシの標本からはじまりました。（彬）

クワガタやカブトで賑わう木も空想ですが、その深みある色と質感は、実際部屋にあった木の枝を観察しながら生み出したものです。（健）

恐竜が歩く時計に水がそそぐ。彼は天性のシュルレアリスト。キャンバスの中で、静物がダイナミックに交錯します。（彬）持参したカボチャ、恐竜と一緒に描いたら、火山に見えてきました。（健）



Ｒちゃんのアヒルもワイングラスのなかにいます。これは「噴水」だそうで、そこで水を飲むために人が集まっています。（彬）黄色い背景の絵は、左にオオバヤシャブシの実と落花生、右にティッシュ箱、中央の小さな丸は、７色芯の色鉛筆の先！モチーフも視点も面白いです。（健）

さて、このように、彼らにとって静物画は、たんなるモチーフの引き写しにとどまらない、とても創造的な行為でもありました。モチーフ同士の出会いから生まれる想像的世界までもが、彼らにはテーブルの上にしっかりと見えていたのではないでしょうか。（彬）

（文責　梁川健哲　高木 彬）

「しぜん」 A・B　　担当　梁川健哲（けんてつ）　高木彬

● 葉っぱ図鑑 （Bクラス）

前号の山びこ通信では、葉っぱをさがして分類するところまでお伝えしていましたが、その後、春学期の終わりには、しぜんBクラスの葉っぱ大図鑑が完成しました！　小さな葉っぱから大きな葉っぱまで、まるい葉っぱからギザギザの葉っぱまで、お山のすべての葉っぱがそこに芽吹いているかのようです。夏休みのあいだ、山の学校の校舎で展示しました。

『お山の葉っぱ実物大図鑑』（79cm×3m27cm）

ご覧のとおり、素晴らしい図鑑が完成しました。しかし、それと同時に貴重なことは、実は、図鑑をつくる過程にありました。あるときは、大きい葉っぱに見えたものが、実は小さい葉っぱの集まりだということを発見しました。それは図鑑のなかで、「ちっちゃいはっぱがあつまったコーナー」としてまとめられました（上図右上）。またあるときは、表と裏で匂いがちがう葉っぱがあることを発見しました。Rちゃんは、ある葉っぱのキャプションに、「おもて　こげたにおい　うら　いいにおい　かたち　まるくてほそながい」と記しています。ほかにもY君は、「おもて　さらさら　うら　ふわふわ」など、手触りについて感じたことを、それぞれの葉っぱのキャプションに書いてくれています。しかも、そうしたあれこれをどのようにひとつの図鑑にまとめ上げていくのかを、メンバーそれぞれが意見を出しあい、自分たちで自主的に制作を進めてくれたのです。大きさや形状など、目で見てわかることはもちろんのこと、実際に経験しないとわからないような匂いや手触りまで、「感じる」ことがいっぱいつまった世界に一つの大図鑑は、こうして完成したのでした。みんなの努力に賞賛を送るとともに、これからもみんなのなかで葉っぱ図鑑づくりが続いていくことを期待しています。（彬）

「やったー！」完成を喜ぶ5人。

夏休み明けのクラス。「葉っぱがたくさんあってよかった」「特徴が分かり易かった」など、図鑑に添えておいた「感想ノート」には、お友達からのコメントが複数寄せられていました。
「皆さん、お待ちかね，今日でいよいよ自分たちの葉っぱを持って帰れるね！」
──「わーい！！」「え～！？まだまだ展示し続けた～い！！」
見て下さった方、感想を下さった方、本当に有り難うございました！（健）

●「特別な石」をもとめて

秋学期は「石」探しをしています。石は、地上にころがる、不思議のかけらです。時を忘れて見つめていると、石は静かに語りかけてきます。

この世に一つの「自分の石」、それを発見するための方法とよろこびを語った絵本『すべてのひとに石がひつよう』をクラスで読んだ後、子どもたちは、無二の親友としての「自分の石」を手に入れるために、森の奥にある沢まで出かけました。感覚を研ぎ澄まし、さまざまな発見をした彼らの様子を、さあ、お伝えいたしましょう（彬）。

＜Aクラス＞

ひみつの森を抜けていく途中、昨年度の冬に作った「ひみつ基地」の様子を見に行きました。朽ちて土に還りかけた基地のかたわらに腰掛け、絵本を読み、いよいよ沢へと続く斜面を、木々の合間を縫って降りていきました。

「石探しのルール」（次ページ参照）をヒントにしながら沢を散策。

「何だか不思議な石！」とMちゃん。粒々がまばらに含まれています。

「この石、『ようかん』みたい！」とH君。その透明感が実にそっくりなのです。この他にも、「からあげ」「焼きおにぎり」「携帯電話（!）」も見つかりました！

「あ〜、蚊に刺されてる！」石探しに夢中になっていたH君とY君の叫びを聞いて、虫除けハーブを片手に駆け寄りました。「大丈夫？」―「ちがうちがう、この石が！」見ると、平たく滑らかな石肌の真ん中だけが、ぷくっと盛り上がっており、それはどう見ても「虫さされの石」なのでした。

別の日にY君は、真っ白な鉱物のかたまりを見つけ「こういうの探してたんだ！」と嬉しそうに持ち帰りました。

また、ある時は、「石の中身を見てみたい」という声が上がったので、みんなで石を割って中身を調べました。そのうち、手で簡単に割れてしまう石もあることを、Mちゃんが発見しました。

ゴーグルを装着。たがねとハンマーで、小さな石に挑みます。

「割れたぞ！」「中は白いね。」「匂いはどうだろう…」

＜Bクラス＞

たった一つの特別な石を見つけようと目を凝らしているうちに、多くの発見が彼らを捉え、対話の相手も石から沢そのものへと広がっていきます。大きな石を運んできて水の流れをせき止める人。川底に堆積した砂や砂利、水までも大事そうに採取する人。みんなのバケツをそっと覗くと、そこにはひとつの「小さな沢」が保管されているのでした。（健）

「…ポケットにいれて走ったとき跳びはねるような…（「ルールその６」抜粋）」

石探しのルール

1　山に行くのがよい
2　静かにして探すのがよい
3　頭を地球に触れるようにし、石を穴のあくほど見つめる
4　あまりにも大きな石は選ばない
5　あまりにも小さな石は選ばない
6　かんぺきな大きさの石を選ぶ
7　かんぺきな色をさがす
8　石の形はあなたにまかせる
9　いつでも石のにおいをかぐ
10　だれにも相談しない

（『すべてのひとに石がひつよう』より）

沢の入り口で見つけた白い砂は、よく見るといろんな種類の鉱物が交じってつくられたものでした。「あ、これ、花崗岩の中身に似てるよ！」と気づいたのはY君です。もし元が花崗岩なのだとしたら、どうしてバラバラの小さな粒になったのかを考えてみるのもまた、おもしろそうですね。

白い砂の表面を掘ると、下から黒い土があらわれました。

「自分の石」が見つかりました！「こんなに小さくてつるつるしてるのを見つけたよ！」と言うのはRちゃん（左下）。どの石も、まるで宝石のように輝いています。

―石のよさをつたえたい

その後、春学期の「葉っぱ図鑑」のように、沢で見つけたたくさんの石を使って、なにか発表ができないかという話になりました。きれいな石を展示するも良し、また図鑑のように分類してならべるも良し、石でなにかを作るも良し。どのように展示するかも自分たちで計画しながら、現在、制作進行中です。みなさま、どうぞおたのしみに！（彬）

「この石、顔に見える！」

「やった！テーブルと椅子作れた！」

「先生、透明のケースある？」試しに水槽をかぶせてみると―お…！何だかすごくいい！

並べた石の間を回遊したり、パズルのように組み合わせたり、種類に分けたり…

A・B両クラスとも既に色々なアイデアが飛び交っています。展示を見に来た人を導くための案内表示計画まで！伝えたい想いが、みんなから溢れ出ています。（健）

（文責　高木 彬、梁川健哲）

『つくる』（月曜 16:30～18:00）　担当 福西亮馬

ライトフライヤーからスペースシャトルまで、100 種類以上！

今学期のはじめは、ゴムで飛ばす紙飛行機を作りました。ケント紙に印刷された型紙をはさみで切り抜き、木工ボンドで接着します。型紙にはインターネットで公開されているものを使用しました（サイエンスファクトリーhttp://www.venus.sannet.ne.jp/eyoshida/）。

かっこよくて飛びそうだと思ったものが意外とそうでなかったり、反対にへんてこりんなものがよく飛んだりと、形による意外性が満載です。当然「かっこよくて、よく飛ぶもの」がいいと思うわけですが、「いざ作って飛ばして」みなくては分からないのが悩みどころです。けれどもその苦労がワクワクの源です。

さて紙飛行機の製作を通じて、はさみの使い方にも慣れてもらいました。最初から型紙の切線を一生懸命たどろうとすると、はさみを持つ手と紙とが干渉してしまってうまく切れません。そこでおおざっぱに余白部分をカットして、はさみを入れやすい状態にしてから線をたどる、という「手順」があります。それはしかし一度聞いて頭で分かるようなことではなく、やってみながら次第に手が覚えていくものです。また慣れないうちは気付かないものですが、カーブを切る時は、はさみではなく紙を回した方が滑らかに切ることができます。こうしたコツも実際に手を動かす回数を増やしながら伝えていきたいです。

飛行機が二機、三機できたら、ボンドが乾く間、今度はカタパルト作りです。さっそくそれを「早く作りたい！」という声が上がりました。ダンボールを適当に切って貼り合せ、その上にゴムを張れば出来上がりです。工夫としては、真ん中に紙飛行機のフックを通す溝を切ることと、溝の両側をわりばしなどで補強することです。ダンボールの繊維を縦に使うと、ゴムを引っ張る際に折れ曲がりにくくなります。カタパルトの改造も興味深いテーマですので、ぜひお家でも二台目、三台目を作ってほしいと思います。

さて、それらを持って、いざ近くの公園に行き、飛行性能を実験しました。カタパルトにはゴムを引くところに 1cm ずつ目盛りをうち、個々の機体に最適な引っ張り具合（張力）を探りました。また地面には 5m、10m、15m と境界線を引いておきました。

結果は、翼が一枚のグライダータイプは強く引っ張った方がよく、反対に二枚の（翼面積の大きい）複葉機タイプは加減して引く方がよいことが分かりました。これは、ゴムの張力が大きければ大きいほど、機体の形状がおもりに近似されていき、弾丸のように（風に逆らって）飛ぶことを意味しています。また一方で、張力を小さくすればするほど、機体の形状から発生した揚力で鳥のように（風に乗って）飛ぶことを意味します。後者の方が紙飛行機らしい飛び方ではあるのですが、今回作ったものでは飛距離に関して言えば、割と大きなおもりをつけて、前者を選ぶ方が得策のようでした。実際に 15m を越えた機体はどれも前者のものばかりでした。ただし思い切り引っ張ると、逆に切りもみして飛距離が伸びないことも経験しました。

うまく飛距離を出せた生徒は「やった！」と喜んでそれを拾いにいき、再びカタパルトに番えては、「見て！ また！」と、興奮して何度も結果を報告しに来てくれました。今回は飛距離による実験でしたが、機会があれば「優雅な飛び方」も研究してみたいと思います。

最後はカタパルトを垂直に立て、空目がけて、どの機体が一番遅く落ちて来るか（つまり長時間飛んでいるか）を競い合いました。かけ声の後にゴムを離すと、飛行機は瞬く間に空中の黒い点と化します。その落下地点をせわしなく目で追いかけ、「4 秒！」「5 秒！」と歓声が上がりました。

本当はおまけで一回だけのつもりでしたが、案の定「もう一回しよう！」とせがまれました。そしていい勝負だと、二回が三回になり…と、つい夢中になって時が経つのを忘れてしまいました。

「用意はいい？ じゃあいくよ！ 3、2、1…0！！」

次の回では、ダンボールでロボットを作りました。ロボットと言っても、自分自身がダンボールの中に入ってなりきるところのそれです。誰でも一度は子どもの頃にした覚えがあると思います。それを私も思い出しながら作ってみました。ダンボールに手足の穴を開けるだけですんなりできるかと思ったのですが、それだと関節が箱の角に当たって曲がりにくいという点が不満だったので、改良することにしました。

さっそくインターネットで調べたところ、「鎧」の作り方を参考にすればよいことが分かりました。服のような型を二枚作り、前と後ろで貼り合わせます。この時、肩の部分は頑丈にしたいのでビニール紐で縛り、脇腹は着脱に余裕を持たせたいのでゴムで結ぶのがコツです。体を覆ってしまえば、あとは大袖（肩当）を付けたり、腕や足に細長いダンボールの輪を巻けば貫禄が上がります。今回は、思い思いの絵を着けてひとまず完成とし、それを着て帰ってお家の人にも見てもらいました。

次回は、頭の部分（兜）や、実際に動き回っても大丈夫な強度を持たせたり、剣や盾も作りたいと思います。

最後に、これは春学期の記録になりますが、ダンボールで秘密基地を作ったのでご紹介します。生徒たちが思い思いに想像力を働かせて、「あったほうがいい」と思うものを頭の中から創造していました。そうしてできた力作です。

一番難儀したのは、何と言っても天井作りでした。板を渡すだけではすぐに重みで崩れてしまうので、垂直な柱を立てる必要がありました。これがなかなか思い通りにいかず、知恵を絞って何とかかんとか仕上げることができました。また、塔の中には人が入り込めるようにし、壁には丸や三角の穴を開けて望遠鏡や大砲も取り付けられるようにしました。さらに中には管制室のコンピューターの絵が描かれ、外には防衛ロボットが置かれました。

いざ基地が完成すると、私はそこへ攻めて来る怪獣役をさせられました。ところが倒れると「まだやられんといてや！」と手応えを期待され、それで私も起き上がって、第二、第三形態とパワーアップする必要が出てきました。ここからは他愛のない遊びですが、次第にそれまでの攻撃が「利かなくなる」ことで隊員たちを驚かせながら、基地の外壁に取り付て、望遠鏡を覗き返したりしました。すると何人かはもう興奮して基地から迎撃しにきました。また飛び道具も音だけでは利かないので、基地から出てきて「ヒューン」と効果音を出しながら弾道を自分の手で描き、「ボカーン」と命中させたことを告げると急いで基地へ戻る、という生徒も出てきました。そうした夢中になった仕草が何とも言えず愉快でした。

そうして戦いを終えた基地を、最後は自分たちの手で壊しました。それがまたカタルシスを味わえたようでした。そして私自身も「こういうことがしたかった」と常々感じていたので、それが実現できて、とても嬉しく思いました。またダンボールがたまってきたら、ぜひしましょう！

（文責　福西亮馬）

『ことば』 1～2年生（水１限）　　担当　高木 彬

前回の春号の山びこ通信では、詩をとおして言葉に親しんでいるクラスの様子をお伝えしました。谷川俊太郎さんの「ひみつのともだち」という詩を題材に、朗読、筆写、創作に取り組んでいるという内容でした。実は、前回の山びこ通信の文章を書き終えた後、同じ谷川さんの「いち」という詩でも、同様の取り組みを行ないました。これについてもお伝えしたいことがたくさんあります。しかし今回は、前号の最後にお約束したとおり、これとは別の取り組みについてお話ししようと思います。

それは「日記」です。やっぱり、文章を書くことの出発点は、自分の日常にありますね。今日はこんなことがあった、こんなふうに感じたというふうに書くときには、ことばは自分にいちばん近いところからあらわれてきます。まるで古くからの親友のように、自然で、透明です。いつ、どこで、だれと、なにをした、など、基本的なところをおさえれば、あとは自由です。

ところが、そう思って日記を書いてもらったのですが、初めのうちは、(今から思うと) みんなわりと淡々として控え目な表現でした。「ーしました。たのしかったです。」というパターンの日記ですね。

それで、だからというわけでもなかったのですが、次は、「未来の日記」を書いてもらいました。お配りしたプリントにはこう書きました。「明日のことでも、大人になってからのことでも、おじいさんやおばあさんになってからのことでもいいです。自分がそうなったつもりで、その日のことをおしえてね。」こうなると、もう日常ではありません。なぜなら、自分のことではあっても、まだ起こっていないことを書くのですから。しかし、最初はむずかしいかなと思っていたのですが、むしろ初めに取り組んだふつうの日記よりも、みんなの鉛筆がすらすらと動いていました。これはちょっと意外でした。たとえばHちゃんは、お渡しした用紙が１枚では足らず、２枚目までにわたって、自分がバレーの大会で優勝した日の日記を書いてくれました。

そこで、さらにすすんで、今度は「だれかの日記」を書いてもらうことにしました。「自分ではない、だれかになったつもりで、日記を書いてみよう。実さいにいる人でもいいし、いない人でもいいよ。」ここまでくると、もはや日記ではありません。日記ではなく、ほとんど小説です。しかし、これを書いているときがいちばんみんなの顔がいきいきと輝いていました。たとえばKちゃんは、「きょう　わたしは、おみずをいっぱい　もらいました」と書きはじめました。最初は何のことかわからなかったのですが、その後、「わたし」が遊び疲れて、夜の寝る頃のくだりになったときに、これがだれの日記かがわかりました。「そして　よるになって　みんな　ねました。　でも　わたしはねませんでした。それで　ほしをみました。きれいだったです。」お水をもらって、寝床から星がみえる――そう、Kちゃんは、自分がお花になったつもりで日記を書いているのでした。「そして　うえきばちの中にいれてもらいました。『このひをまっていたわ』といいました。そして　みんな『よかった』『やった』と　みんな　おおよろこびしました。」

自分が自分以外ではありえないこと、そこに一切のよろこびやかなしみが由来しているように思えることもあります。しかし私たちは、ことばによって、未来を描くことができる。誰かになることもできる。ことばは、この先にあるよろこびを描き出し、かなしみをちっぽけなものに変えてくれる。アリストテレスの『詩学』ではありませんが、実際起こったことよりも、起こりそうなこと、起こってほしいことを書くほうが、彼らにとってリアルなのかもしれませんね。

と、ここまで書いてきたところで、もう紙幅がなくなってしまいました。次号では、秋学期からクラスで読み進めているヒュー・ロフティングの『ドリトル先生物語』についてお伝えしたいと思います。

（文責　高木 彬）

『ことば』 3～4年生Ａ（火曜２限）　担当 岸本廣大

このクラスでは、春学期から引き続き、漢字パズルと『オオカミ王ロボ』の輪読を二本の柱として進めています。前号の「山びこ通信」で紹介した子供さん同士の「教えあい」と「競いあい」も良い形で継続されており、クラスの雰囲気も和やかです。今号では、『オオカミ王ロボ』の読解の様子を紹介したいと思います。四月から読み進めてきたこの物語も、いよいよクライマックスです。この原稿の執筆時点では、ブランカを失ったロボが遂にシートンの罠にかかった場面まで進んでいます。

この物語を読む前に、オオカミのイメージについて、子供さんに確認したところ、童話などで培われた「悪

しく賢しいオオカミ」というイメージが強く見られました。そして実際に第一章を読み始めると、「オオカミ王」と称されるロボ率いる群れが、カランポーの牧場を荒し回って、牛を2000頭も屠り、それに防ごうとする人間の反撃や罠を頭脳プレーで軽く往なしていました。これはまさしく「悪しく賢しいオオカミ」です。細かな表現など難しいところもありましたが、当初のイメージに沿う前半は、子供さんの読解をスムーズにしてくれたように思います。

しかし、後半になるにつれ、そうした見方では理解しきれない場面が多く出てきました。特に、ロボのつれあいであるブランカの捕獲と死の場面、それに続くロボの嘆きの場面では、リアルな死の残酷さや、ロボの悲しみを代弁する作者シートン（そして訳者）の生々しい筆致によって、人間よりもむしろロボに感情移入してしまいます。子供さんも、これらの場面を読んでいるときには、真剣ながらも少し暗い表情をしていたのが印象的でした。読了後の感想を実際に聞いてみないとわかりませんが、おそらくこの場面で子供さんたちは、ロボへの共感による悲しみと同時に（意識していたかは別として）困惑していたと、私は感じています。というのも、前半まで理解の一助になってきたイメージと違うオオカミ像がここには表現されているからです。

物語の批評はおくとして、小学生の「ことば」のクラスとして重要な点は、子供さんたちがそのような困惑を感じるほどに物語を読解できたということです。正直なところ、この本は小学校中学年の子供さんが「一人」で読むには少し難しいものでした。もし一人で読んでいたら、あの困惑を覚えることはなかったかもしれません。しかし、読解を助ける「先生」と、自分では気づかない点を指摘してくれる「仲間」と共に読み進めることで、一人では難しいこの物語もしっかり読解できるのです。ブランカの死とロボの嘆きの場面で見られた子供さんの表情は、その証だと私は考えています。

皆さんがこの「山びこ通信」を読まれる頃には、『オオカミ王ロボ』を読み終わっているでしょう。子供さんがどのような感想を書いてくれるのか、そして次はどんな物語を一緒に読んでいるのか、楽しみにしたいと思います。

（文責　岸本廣大）

『ことば』３～４年生Ｂ（水曜２限）　担当 高木 彬

このクラスでは、前号の山びこ通信でお伝えしたように、春学期は漢字の創作に没頭していました。前号の記事には間に合わなかったのですが、夏休みに入る前には、全１４８文字からなる創作漢字辞典を完成させることができました。画数と部首ごとにクラスのみんなが実際に編集しました。この編集作業はなかなか骨の折れるものでしたが、みんなは完成に向けて積極的に取り組んでくれました。

みんなはもう何週間も前から完成を待ち望み、手にとるのを楽しみにしてくれていました。ついにその日がやってきたときのみんなの顔は忘れられません。授業中、うっとりとページを繰る時間がしばらく続きました。実際に手にとってみると、ずっしりと重いです。この重さとは、すなわち彼らが漢字にかたむけた情熱の深さのことです。漢字の奥深さ、そしてみんなと力を合わせて何かを成し遂げることの素晴らしさを体験してもらえたのではないかと思います。生まれた漢字が、千年先まで続きますように。

さて、秋学期からは、腰を据えて物語の世界に没頭してもらおうと思っています。選んだのは、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』。物語との出会いを大切にしてほしい、「自分の本」として将来にわたって大事にしてほしいとの想いから、あえてお一人ずつに『星の王子さま』を一冊ずつ手に入れていただきました。一冊の良質な長編作品には、私たちの住む世界とは別の、それ自体で完結したもう一つの世界が生きづいています。そこには、物語というかたちをとりながら、世界を構成するあらゆる要素が出そろっています。『星の王子さま』は長編ですが、それをじっくり読み通すことは、たんにことばを学ぶという意味を超えて、さまざまな見識と視野を拡げることになるでしょう。また、自分の力で長編を読み通すという体験は、読み聞かせで育まれるものとはまた別の力、すなわち、これから生徒さん自らが数かぎりない本の海を航海していくための、自信と勇気を築いていくことでしょう。

毎回のクラスで最初にすることは、前回読んだ部分の振り返りです。まずは本を閉じたまま、どんなふうに語が進んでいたか、そこで大切だったことは何なのかを、みんなに思い出して発表してもらいます。私は、本当に思い出せないようなとき以外は、口を挟まないように心がけています。この思い出す時間が、山の上の教室を、王子さまの住む世界へと運んでくれます。

それから初めて本を開けます。基本的には、段落ごとに順番に朗読をしながら進めています。意味のわからない言葉があればその場でその段落の朗読担当者に辞書を引いてもらい、全員でその意味を共有して、テキストに書き込んでもらいます。ある程度進んで、小さなまとまりを読み切ると、朗読を中断して、その内容について議論したり、あるいは自分の思うことや想像したことを書いてもらったりします。

この記事を書いている現在、クラスでは第Ⅲ章を読み終えて、第Ⅳ章にさしかかっています。第Ⅲ章で主人公の「ぼく」は、砂漠の真ん中で出会った「王子さま」にこう尋ねます。「ぼっちゃん、あんた、いったい、どこからきたの。〈ぼくんとこ〉って、それ、どこにあるの？」さて、どこにあるのでしょうか。それがどんな星なのかは、この時点ではまだわかりません。そこでみんなには、王子さまの故郷の星を想像して、絵と文で表現してもらうことにしました。「想像」は、この物語の大きなテーマの一つです。ウワバミのお腹の中には、あるいは四角い箱の中には、いったい何が入っているのか。それを想像できる感性こそが何よりも大切だと、『星の王子さま』の第Ⅰ章と第Ⅱ章にはありました。

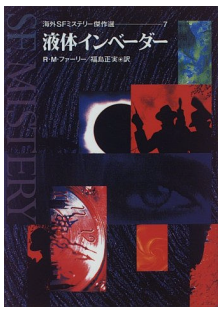
H・H君は、王子さまはもとはカエルだったと書いてくれました。彼の想像した「魚水（ぎょすい）星」には、地球とは別の生態系があります。人口の大部分を占めるカエルのほかに、カワウソとイヌが混ざった「ワンうそ」や、三つの目を持つ「三目とかげ」がいて、線路には電車の代わりに「鳥車（ちょうしゃ）」が走っている。王子さまを地球まで迎えに行くのは、背中にイスのついたヘビである。また、そこでは重力も特殊で、水に対してだけ重力が弱い。そのため、雨はゆっくりと降り、川はキラキラと空中を流れている。T・S君は、まるで天の川だと喩えました。この空中を流れる川の描写だけで、また一つの物語が生まれそうです。彼の感性は美しい。

あるいはK・Tちゃんの「ハコハコ星」では、地上に存在するのは、いくつかの空っぽの箱だけです。「それを王子さまが そうぞうで、おふろやベッド、花だんなどにしている。お話の中の『ぼく』がハコをあげた時にすごくよろこんだのは、いつもの生活が はこだけなので そうぞうしやすかったから。住人は王子１人だが、王子のそうぞうでは１０人のこびともいるらしい。」そこにあるのは空っぽの箱だけなのに、王子さまの想像の中では、すべてのものが存在しうる。なにもないからすべてがある。つまりK・Tちゃんは、『星の王子さま』の本質をしっかりと捉えながら、いわば「想像の星」自体を想像してくれたのでした。

『星の王子さま』のテーマはやさしくはありません。しかし、文章はやさしい。やさしい言葉で、大切なことが語られています。難しい言葉でどうでもいいようなことが書かれた本とは正反対の本です。「大切なことは、目には見えない」とは、『星の王子さま』を語るときに必ずと言っていいほど引用されるフレーズです。『星の王子さま』をきちんと読んだことがなくても、あるいはこのフレーズは知っているという場合もあるでしょう。しかし、ではその「大切なこと」とは一体どのようなことなのかということについては、これは物語を全部読み通さないと、本当にはわからないようになっています。秋学期では、こうした大切なことを、みんなと一緒に考えています。

（文責　高木 彬）

『ことば』 3～4年生C（金曜１限）　担当 福西亮馬



今学期は、SF ミステリーの『液体インベーダー』（R・M・ファーリー、国土社）を読み終えました。謎の液体が生き物を溶かす凶暴な酸であること、その実体が微小なウィルスでかつ高度な知性を有し、スピーカーを媒介に人間と会話したり、書物から底なしに知識を蓄えられること――。これは私のいわば「取っておき」の一冊です。小学生の頃に偶然、図書館で借りてきてそれを読んだ時のことを、まるで昨日のことのように覚えています。小学生だった私はそれまであまり本には興味がなかった（と言うのも読むのが遅くて苦手だった）のですが、読むなりこれほど世の中に楽しいことがあっていいのか、他にもこうした本があるだろうかと、俄然、本の世界に食指が動いたのでした。それを思い出してクラスで紹介しました。

最初は、「ことばの授業で SF なんて…」と反対されるのではないかと心配でしたが、一回一回が真剣勝負、体を張って思い出をぶつけてみようと思いました。最初はイメージしにくいところがありましたが、物語が展開するにつれてだんだんペースが上がり、クライマックスからは一息に読み終えることができました。このクラスではこれが二冊目の完走となりますが、生徒たちの集中力に改めて拍手を贈りたいと思います。

さて、液体生物は水を得て増殖するのですが、つまりそれが一部分でも、水道管や川を経由して海に混じったら最後、たちまち地球上に液体生物が溢れてしまうのではないか――という得体の知れない恐怖を覚えさせるところが、この作品の見事なところです。その液体インベーダーが、ある時点で人間の欲によって暴走し、人間たちの張った非常線をかいくぐって海岸線まで到達する危機的状況は、今読んでも手に汗握ります。（三年生だった私ははじめてこの本で「非常線」という言葉を知りました）。そしてそれを救ったのが、すべての始まりとなった液体生物のオリジナルな個体と、一人の研究者との間に芽生えた友情という展開でした。

その記憶をたどりながら、今一緒に読んでいる生徒たちの様子をうかがうと、「きっとこいつが裏切り者にちがいない」と思わず声に出して推測したり、本を閉じた後も「自分ならこういう方法で液体生物をやっ

つける」と考案するあたりに、物語の中に入り込んでいると感じました。そしてある生徒が、「最後は、わりといい終わり方やったな」と気さくに言ってくれた時には、嬉しくてほっとしました。

ところで最近はクラスでまた嬉しい発見があります。それは、生徒たちの朗読の音色からちょっとずつ、「ああ、この頃はよく本を読んでくれているんだな」と普段の読書の様子が垣間見られることです。黙読した量は音読にも現れるのですぐに分かります。単に読み方が上手になってくれるということもありますが、根っこに本を好きになってくれること自体、嬉しいことはありません。きっとそれは本が好きな人であれば、皆さん同じ気持ちだろうと思います。

一方で、他人の読み方を非難せずにじっとテキストを追っている生徒たちはとてもありがたい存在です。その生徒たちのおかげで、私もタイミングを見計らってうなずいたり、ほめることができます。また長い部分を読んでくれた時や、短い台詞でも気持ちを込めてくれた時には、「ありがとう」と言うことができます。何でもないことかもしれませんが、そのようにより本を好きになるお手伝いができればと思います。

さて今読んでいるのは、『マガーク探偵団』（E・W・ヒルディック、あかね書房）というシリーズの一冊です。これはちょうど生徒たちと同じ九、十歳の子供たちが、探偵事務所を構えており、大人顔負けの行動力で事件に挑むという推理物です。「続きが気になるものが読みたい」という生徒側のリクエストをもとに、また子供を子供扱いせずに大人と同じ社会の一員として応援している内容が、このクラスに相応しいと思って選ばせてもらいました。マガークと一緒に事件を解決し、爽やかなラストシーンをぜひクラスで共有したいと思います。

（文責　福西亮馬）

『ことば』 5年生（金曜１限）　　担当 高木 彬

Hちゃんは現在も黙々と小説の創作に打ち込んでいます。現在執筆中の『星の王子さま』は昨年度の末から書きはじめていますから、冬休みや夏休みを入れると、少なくとも８ヶ月間は書き続けていることになります。たしか前回の山びこ通信でも、この『星の王子さま』のことをお伝えしたような気がします。彼女の、創作にかける情熱と、それを維持する根気には、頭の下がる思いがします。

実は、昨年度から私も、Hちゃんと一緒に小説を書いています。創作に真剣に取り組む姿を先生自らが見せることが、クラスの心地よい緊張感と一生懸命な雰囲気をつくることになると考えたからです。また、小説を書く喜びや苦しみをHちゃんと分かち合いながら、Hちゃんの創作の刺激になればいいと願うからです。

Hちゃんの向かいの机で書きながら、私は２本分の鉛筆の音に耳を澄ませます。ときどき顔を上げて進み具合を確認します。向かいの席から鉛筆の音が聞こえないときは、Hちゃんが次の展開について考えているときです。すぐにはアドバイスしません。自分の頭で考える時間が大切です。するとだいたいの場合、ある程度時間が経つと執筆が再開されます。しかしそれでも悩んでいる場合には、どちらからともなく話しかけ、一緒に考えます。

もちろん私は、物語の内容については、ここはこうすべきだなどと言いません。私がすることは、いまどんな話の流れになっていて、誰が登場して、それぞれの登場人物がどう思っているのか、そういったことをひとつひとつ詳しく問いかけていくことです。するとHちゃんは、それに答えていく中で頭を整理し、物語をどのような方向に進めれば良いのかを自分で発見することができます。文法や漢字、原稿用紙の使い方などには一定の正しさが存在します。しかし物語には、倫理に反しないかぎり、正しいも間違いもありません。Hちゃんが自分の中にある物語をうまく引き出せるようにサポートすることに、私は徹しています。クラスの最初に、プロの作家が書いた小説（現在なら、斉藤洋さんの『「おまえだ！」とカピバラはいった』）を読んで、物語を書くための栄養を摂ってもらっているのも、これと同じ理由からです。

あるいはこんなこともありました。私の鉛筆が止まっていると、Hちゃんが「いま、どこ書いてるの？」と尋ねてくれたのです。おそらくHちゃんも、私の気づかないところでこちらの様子を見てくれていたのでしょう。私は、いま自分が書いている場面について詳しく話しました。Hちゃんはそれを真剣に聴いてくれました。しばらく話した後に、突然「ガラスは？」とHちゃんが言いました。「ガラスを使えば？」 そのとき私は目のまえがパッと開けたような気がしました。電話は携帯電話からかけるのではない。電話ボックスからかけるのだと思いついたのは、そのときでした。

小説を書くことはたのしい。しかも、物語の世界に没頭する中で、気づけばことばの表現法を会得している。道筋を論理的に整理する力を培っている。想像力をはたらかせるトレーニングをしている。小説を書くことは、とても豊かで、総合的な営為です。これからも、創作をとおして、お互いに切磋琢磨しながら、ゆっくりとことばに親しんでいきたいと思います。

（文責　高木 彬）

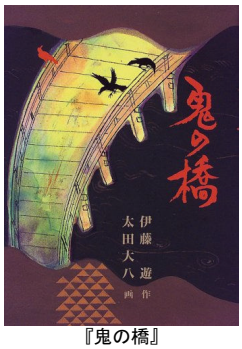
『ことば』 6年生（木曜１限）　　担当 福西亮馬

このクラスでは春学期から引き続き、百人一首を覚えています。最近では、詠み上げ用の音源を生徒たちが自作してくれました。デジカメを使って録音したそれをパソコンに保存すれば、ランダムに再生できるリストの出来上がりです。自分の声の恥ずかしさには最初戸惑いを隠せない様子でしたが、百首全部を吹き込み終えた時には相応の達成感がありました。その間に「こひすてふ」を「こいすちょう」など、それまであまり気にしなかった詠み方も、この際必要に迫られて覚えました。

さっそくその音源を使って生徒チームと私とで勝負をしたところ、結果は 55 対 45 で、生徒チームの勝ちでした。私も本気を出して敗れたので、とても悔しい一戦でしたが、生徒たちは自信をつけてくれたようでした。そして嬉しいことに、最後に自分たちの取った歌を「新しく得意札に加えたい」とまで言ってくれました。実戦で得意札を取れた嬉しさから、否応なくモティベーションが上ったようでした。

また勝負が競ってくると、上の句を詠む間に探す方が有利であることを実感したり、相手に先を越されて、「もう！ 予想通りの下の句だったのに…」と悔しさをあらわにするシーンも何度か見られました。そのように慣れ親しむうちに、百人一首の付録の一覧表にも目がいき、「むすめふさほせ」といった決まり字にもいよいよ食指が動いたことも、見逃せない心境の変化です。このように自然と覚えたくなるような展開を今後も大事にしたいと思います。

本読みの時間には、『鬼の橋』（伊藤遊、福音館書店）を読んでいます。三百ページ以上の長編を取り上げたのはこのクラスでは初めてのことで、もし読み切ることができれば、六年生最後を飾る一冊となるだろうと思います。



『鬼の橋』

「六道の辻」という伝説に取材したこの物語は、小野岑守（小野妹子の子孫）の子である篁（たかむら）少年が、自分のせいで死んでしまった妹の面影を追って、古井戸からあの世（賽の河原）へと落ちてしまうところから始まります。そしてその後も何度かこの世とあの世を往来し、坂上田村麻呂の霊魂や、父が作った橋（五条大橋）のたもとに住み着いた阿子那、田村麻呂に射られて角を片方なくした鬼の非天丸といった、いずれも個性的な背景の持ち主との交友を深めていきます。

『鬼の橋』でも弓を構える篁が幾度か描かれています。

小野（参議）篁と言えば、「わたの原八十島かけてこぎ出でぬと 人には告げよあまのつり舟」という歌が百人一首に納められていますが、その文才だけでなく、歴史的にも能吏として活躍したそうです。また時の上皇に疎んじられて隠岐島に流されても節を曲げなかったことから剛直でもって知られました。さらに正義感の強い一面を人々から愛され、あの世通いの奇行の噂とあいまって、閻魔大王を補佐したという伝説まで残されています。

この作品にはそうした篁の少年時代としての相応しい行動や心の動きが、想像力豊かな筆で描かれています。それが、今ちょうど社会の授業で歴史に興味を持ってくれている生徒たちの好奇心にかなえばと思っています。また作中の篁少年と同じように、生徒たちにもいつかは訪れることになる「疾風怒濤」の時期に、一つでも多く確かな碇を持っていてほしいという願いを込めて、この本を読んだ思い出を贈りたいと考えています。

最後に、先を少しだけかいつまんで話しますと、鬼にたぶらかされた小役人が、失火で焼け落ちた橋の責任を逃れようと、阿子那に濡れ衣を着せるシーンがあります。真実を訴えても誰にも信じてもらえない阿子那を助けるために、非天丸は鬼の姿にその身をやつそうとしますが、制止する阿子那を前に葛藤します。篁は、親子同然の情で結ばれたその二人の苦境を目にし、「自分に何ができるか」という問いを強く突きつけられます。そして、大切なものをなくした過去の後悔から抜け出して行動する時点が、この物語のクライマックスです。

それを一緒に味わえることを、今か今かと楽しみにしています。

（文責 福西亮馬）

『かず』　1～2年、3年B、5年（火1）（金2）（火2）　　担当　福西亮馬

私の受け持ちのクラスでは、ドリルとパズルを交互に取り組んでいます。その配分はだいたい半分ずつですが、それぞれのクラスにはメンバーによって特徴がありますので、時に 6：4 にしたり、4：6 にしたりしています。

ドリルでは、学校の先取りは極力避け、復習を主にしています。もちろん先取りが現段階の理解を「深める」必然性のある場合は別ですが、他人への優越感をくすぐるような理由では効果が薄いと考えます。それは理解を「浅く」して消化不良をおこす危険性でもあり、一番気になるのは、今見えていない弊害として、将来の伸びしろに影響することです。

新しい単元に進むためには、それまで基礎の部分で×だったところを○に変えておく必要があります。そして

×を○に変えるためには、それまでのもっと易しいところで○を◎に変えて、うんとたくさんの自信を蓄えておく必要があります。ドリルの取り組みは、その×と○と◎のそれぞれの階段を適切に選んでしっかり登ってもらうことを目的としています。特に反復回数の少ない文章題では、一年生の問題からしてもらうことが多いです。また復習をメインに据えることには、子供が焦って当てずっぽうな答を返したり、それに対して大人がつい苛立ちを見せて子供に苦手意識を植え付けてしまうといった悪循環に陥ることを防ぎ、むしろ「できる」ところでほめる点をたくさん見つけられるという、前向きな意味があります。

たとえば5年生のクラスでは、今、学校で一度使用したドリルをもう一度解き直しています。それには思いがけない収穫がありました。できたところに「やった！」と思えるのは他のドリルと同じですが、できなくても一度やったことがあるという認識から、「何で違うのかな？」ともう一度落ち着いてその問題を見つめ直す余裕が持てるからです。その余裕に対し、大人が丁寧に付き合えば、あやふやだったものは確実になります。

ところで、学校のドリルを宿題でする時は、問題と答をノートに書き写しているかと思います。そうやってせっかくきれいなままに置いてあるドリルなのに、実際に2巡目をしていない人が何と多いことでしょうか。今こそ、思い切り書き込んでもいい時です。漢字ドリルもしかり。ぜひお勧めです。

繰り返しになりますが、ドリルの意義とは、あやふやだったものが確実になることです。それには一度手垢をつけたドリルをもう一度開くことが究極的な方法です。復習範囲の多い高学年では特に、それを無駄と思わずにぜひ紐解いてみて下さい。

一方、パズルでは、4年生で今している『論理パズル』につながるような経験を蓄積しています。論理パズルがどのような取り組みかは、次ページの4年生クラスの拙稿をご覧下さい。

さて「蓄積」と一言に言っても、それはうんと長い時間のことを指します。よくあるたとえですが、私たちはご飯を食べたり用を足しに行ったり、階段を登ったり降りたりという日常の動作を、2+2＝4と同じぐらいに、少なくとも10001が素数かどうかを判定することよりも簡単にこなしています。けれども実はロボットやコンピューターからしてみれば、10001が素数かどうか（ちなみに73で割り切れます）よりも、お箸を持って米粒を口に運ぶことの方がずっと、脳では高度な処理をしていると考えられます。なぜ「より高度」なことが「より簡単」にできてしまうでしょうか？ それは長い長い時間をかけてその動作を獲得してきたからに他なりません。

つまり、難しいことを克服するものが何かと問われれば、それはひとえに「蓄積」です。「経験値を稼ぐ」と言ってもいいかもしれません。では何がそれを促すのでしょうか？ 一つには、「好き」という気持ちが挙げられます。それはまた「意気込み」と言いかえてもいいかもしれません。ではそれ自身はまた何によって支えられているのでしょうか？

おそらく私が考えるに、「無駄を恐れない」という経験がそれです。これはある意味、先に進みたい人には楽しみどころか苦痛となるものです。けれども、「好きこそ物の上手なれ」という言葉がありますが、それは、どれだけ人が無駄と思うようなことを無駄と思わずにできるかということです。この（他者に追随を許さない）無駄の蓄積、すなわち「蓄積の蓄積」こそが「好き」を支えています。一方、それをうまくショートカットして教えたところで、結局はいつか「好きかどうか」で本人が反芻した時点で、また自信が揺らいでしまうことになります。

今クラスでしているパズル的な要素の取り組みはすべて、そうした「付け焼刃に終わらせないようにするにはどうすればよいか？」という問いから出発して考えたものです。一見無駄で遠いように思われるかもしれません。ですがそれは、一ヶ月や二ヶ月のことではなく、二年三年というスパンで、必ずや生徒たちの「考えることが好き」という気持ちを支える基礎になっています。

（文責　福西亮馬）

『かず』　３年生Ａ（金曜2限）　　担当　高木 彬

このクラスでは、春学期に続いて秋学期でも、ドリル、パズル／ゲーム、「かずの探求」の３本立てて、毎週進めています。

前号でもお伝えしましたが、「かずの探求」というのは、かずの意味を考える取り組みです。たとえば、「４」だったら「春夏秋冬」とか、「６」だったら「サイコロの目」とか、そういう身近なところにかずを発見して、思いつくかぎりリストアップしていきます。そして、そのリストを眺めて話し合いながら、毎週、それぞれの数字ごとのおよその性格を見つけていくのです。

秋学期では、とうとう「１０」の大台を突破しました。印象に残っているのは、「３」の週のときに、Ｍｉちゃんが「東京スカイツリーのあしのかず」と挙げてくれたことです。家で調べてきてくれたそうです。「でも東京スカイツリーは、地上では正３角形だけど、上に行くにつれてだんだん円くなる。」Ｍｉちゃんは、正３角形から正円へと変化していく各層の断面形状を描いて、そう説明してくれました。東京スカイツリーはテレビなどでみんな見たことがあるけれど、その脚が「３」本で、断面が正「３」角形になっていて、しかもそれが上に行くにつれてなだらかに円になっていくことなんて、だれも（私も！）知らない。すごいです。でもそれは、たんに、みんなの知らないことだったからすごいという以上に、それだけのことを調べてきてくれたＭｉちゃんの努力がすごいのです。

そしてその後、話題は、「では、なぜ脚が３本なのか」ということへ発展しました。ちょうど教室にあった、３本脚のスタンド式カバン掛けと、４本脚の長テーブルとを比較しながら、４本脚だと、脚の並びに対して平行な方向に倒れやすいけれど、３本脚なら、どの方向が特別倒れにくいということはなくなり、安定するという話になりました。カメラの三脚が「３」本なのは、カメラを確実に固定するためです。スカイツリーの脚が「３」本なのも、こういうところに理由があるのかもしれませんね。「３」原色や「３」権分立、「３」人寄れば文殊の智恵など、「３」は安定や調和のかずなのです。

繰り返しますが、このクラスは、ドリル（３０分）、パズル／ゲーム（１５分）、「かずの探求」（１５分）の「３」本立てて進めています。それは、実際の算数問題を解くことを基本にしつつ、その根っこを支える論理力・持続力・算数を楽しむ気持ち、そして身近なかずから広がる知的好奇心の、そのどれもをバランスよく大切にしたいからです。どの柱も欠けることなく、相互に支えあうことで立つあのツリーのように、みんながどこまでも伸びていくことを、応援しつづけたいと思います。

（文責 高木 彬）

『かず』 ４年生ＡＢ（水曜1、2限） 担当 福西亮馬

秋学期から『論理パズル』を導入しました。仮定を立てて結論を導くこと、そのために場合分けをしたり、真や偽の情報から矛盾を導いて、可能性のあるすべての答を見つけ出すといった一連の思考を、ここでは「論理」と呼ぶことにします。

授業では二週間に一問のペースで、以下のような問題を出しています。

『三匹の子ぶた』

左から順に、わら、木の枝、レンガの家が並んでいます。最初、わらは長男の子ぶたの、木の枝は次男の、レンガは三男の家でしたが、気分を変えようということで互いの家に引っ越しました。

そこで、三男が「ぼくの新しい家は、長男の家のとなりだよ」と言いました。この言葉は、長男が今レンガの家に住んでいれば嘘で、そうでなければ本当です。そして三匹とも前とは別の家に住んでいます。さて、三匹の新しい家はそれぞれどこでしょうか？

まず考える出発点は、「もし～だったら」とひとまず仮定を立てることです。その立て方は着眼点によって変わります。たとえば「レンガの家に住むのは誰か」に着目してみます。すると、レンガの家に住む可能性は、長男、次男、三男のうち、問題の条件から三男は住めないので、結局、長男か次男かの２通りを考えればよいことになります。

同様に「木の家」や「わらの家」に着目して考えることもできます。言われてみれば当たり前ですが、いざその理屈を、自分の手を動かして、何もない白紙に示すとなると、話は別です。「できる」のと「できそう」なのとは違います。実際にそうした思考回路がなければ、小学生に限らず中学生でもなかなかうまく書き始められるものではありません。つまりそれを当たり前にまで持っていくトレーニングが必要なのです。

そこで授業では、たっぷり時間をかけて証明してもらっています。以下のように「文章にする」というのが大事です。証明は、誰の目にも「そうだ」と納得してもらうことに価値があります。

さて一つ、ここに生徒の証明をご紹介します。（カッコは私が補った言葉で、あとはそのまま H 君の言葉です）

H 君の証明

長男がわら、次男が木、三男がレンガの家にすんでいたので、みんな同じ家には帰れない（条件の確認）。

もし、三男がわらの家にひっこしたら、「ぼくの新しい家は、長男の家のとなりだよ」と言っているので、三男はわらの家か木の家。けれど長男がレンガの家にすんだらうそをつくので、そうでなければ（長男がレンガの家でなければ三男の言うことは）本当ということ。

わらが三男なので長男が木のえだの家。そうなるとのこりのレンガの家に入るのが次男なので**むじゅんがない。**

もし、三男が木のえだ（の家）だったら、長男は、三男のとなりだから、前すんでいた家にはもどれないので、長男はレンガの家になる。けれど長男がレンガの家にすむと（三男は）うそをつくので、三男は「ぼくの新しい家は、長男のとなり。」がうそになるので、三男はわら（の家）にすむことになる。三男が木の枝（の家）だったらさいしょのもし（仮定）と**むじゅんする。**

つまり答えは、長男は木のえだ、次男がレンガ、三男がわらの家になる。**これしかない。**

H 君は「三男がどの家に住むか」で場合分けしています。おそらく三男にだけ複雑な条件が付いているので、そこをおさえると説明しやすいと考えたのでしょう。そして、わらと木の枝のうち、木の枝の方は矛盾するので、わらしかないと結論付けています。

このように、H 君は前半で「むじゅんがない」答が一つ見つかっても、後半で「木の枝の場合」も忘れずに考えており、きちんと場合分けを完成させています。それが最後に「これしかない」と言い切れることを支える根拠となっています。また、かぎカッコで示された条件文も、面倒臭がらずに繰り返し書き写し、筋が通るように書いていることも称揚すべき点です（これは案外当たり前ではありません）。

こうして示された論理性の素晴らしさは、それを書いた者が大人であろうと子供であろうと問うところではありません。むしろ対等であるところに、解き切った時の大きな喜びがあります。それを味わい、培うことは、およそ数学的思考を必要とするあらゆる問題にとってもプラスとなるので、ぜひ応援したいと考えています。

（文責　福西亮馬）

『かず』　６年生（水曜3限）　　担当　岸本廣大

六年生にもなってくると、算数の中で分野の得意不得意、あるいは好き嫌いがはっきりしてきます。各自の課題を解決する具体的な方法は、生徒さんによって様々ですが、このクラスの生徒さんの様子を見ていると、課題の解決に際して、共通する点もあることに気づきました。この「山びこ通信」では、クラスの様子を伝えながら、その共通点について考えてみたいと思います。

このクラスでは、ある生徒さんは文章題、もう一人は計算問題と各自課題が異なっていました。様々な分野の解法を必要とする文章題に取り組む生徒さんには、答えだけでなく、どのような方法を、どんな順番で用いたのかまで、書いてもらっています。生徒さんは、図や表を駆使して、私が想定するよりも丁寧にその過程を書き記してくれました。計算問題を課題とする生徒さんは、特に小数のかけ算とわり算に取り組みました。基本は整数のそれと同じですが、小数点の移動が加わる点で難しくなります。生徒さんは、筆算の問題でないところでも、筆算による計算の過程を丁寧に残してくれました。

一見、全く異なる課題ですが、共通する解決法は、考えの過程を記しているという点です。そして、これが算数のみならず、多くの勉強にも通ずる「虎の巻」だと、私は考えています。過程を残すことによって後に見直したときにわかりやすく、また手を動かすことで解法が定着しやすいといった効用も期待できますが、何よりも肝要なのは、間違えた時にその原因が視覚的に理解できるということです。頭の中だけで理解するということは、子供だけでなく大人にとっても難しいことでしょう。特に、複雑な計算問題や文章題において、口だけの解説は本人が思っている以上に理解されません。そこで、口頭での解説と共に、どこで間違えたのかを視覚でも知ることによって、同じ間違いを繰り返さず、本当の意味での問題の理解を確実にすることが可能になるのです。

例えば、「2/1(木)から 200 日後は何月何日何曜日か」という問題では、日付は間違ったものの、曜日は正解するという不思議なことがありました。早速、過程を見直すと、「2/1」は「200 日後」に含んだまま計算した一方で、「(木)」はそれに含めていなかったという原因があることに気づけました。過程を記したことで、このように自分の弱点を知ることができたのです。また、筆算を間違えた際にも、それを全て消してしまうのではなく、どこを間違えたのかをもう一度見直すことが大事です。生徒さんには間違えた筆算の横にもう一度筆算をして、間違えた部分を確かめてもらっています。かけ算のミスなのか、たし算のミスなのか、繰り上がりのミスなのか、自分が苦手な傾向を知るという意味でも、早いうちにこの意識を定着させたいですね。

答えだけでなく、過程を大事にする。日常生活でも生かせるこの方法を、これからも「かず」を学びながらしっかりと身に着けていきたいと思います。

（文責 岸本廣大）

『中学・日本語の読み書き』（火曜３限）　担当　岸本廣大

このクラスでは、一人で読むには少々難しい作品を、みんなで読むという取り組みを行っています。春学期は、いくつかの短編を読みました。前号でも紹介した新見南吉の『おじいさんのランプ』の後、芥川龍之介の『猿蟹合戦』と巖谷小波（いわやさざなみ）の『三角と四角』などに挑戦し、見事読み切りました。その際、ただ読むだけでなく、読了後にはそれぞれ課題に取り組みました。『猿蟹合戦』は、昔話のさるかに合戦の続編を現実的に皮肉たっぷりで描いた作品です。この作品読了後には、生徒さんの知っている昔話の続編を、現実的に描いてもらいました。また、三角定規と画板が角の多さを競う『三角と四角』を読み終えた後は、「モノ」を擬人化して喧嘩させてみるという課題にも挑戦しました。詳細はブログをご覧になっていただきたいと思いますが、単に読むだけでなく、自ら書くという作業を通して、物語の核心に少しでも近づけたのではないでしょうか。

さて、秋学期は一つの長編作品を読むという課題に挑んでいます。現在読んでいるのは、生徒さんから要望のあった太宰治の『人間失格』です。少し前に、有名漫画家が表紙を飾ったことで話題になりましたが、それ以前から長く読み継がれている作品で、もはや古典といってもよいかもしれません。しかし、多くの古典がそうであるように、この作品も中学生が一人で読むには難解な作品です。内容も、いわゆる子供向け作品ほど起承転結や盛り上がる場面がはっきりしているわけではありません。逆に、主人公たる大庭葉蔵の陰鬱な人生が淡々と語られていく作品です。

現時点では、ちょうど葉蔵が東京に進学したところまで読み進めました。ここまでは、学校を舞台とし、生徒さんらと年齢が近かったこともあり、葉蔵の心情を（共感するかは別として）まだ理解しやすかったでしょう。しかし、生徒さんが完全には理解していないと、現時点で私は思っています。それでも良いのです。書いてあることを読み取り、話の流れを追うだけでも、今は十分です。というのも、ここまではいわゆる伏線のようなもので、全体を読了後、再び読み返すことで、より深く理解できると期待しているからです。

ただ、ずっと陰鬱な作品を読むのも気が滅入り、集中力も持たないと感じたため、最近は漢字を使ったクロスワードパズルなども息抜きとして取り入れています。漢字だけでなく、様々な熟語にも触れて、表現力を豊かにして欲しいですね。

これから読む『人間失格』の後半が、この作品の真骨頂です。もしかしたら、生徒さんには理解しがたい場面が今まで以上に出てくると思いますが、途中で投げ出さず、最後まで読むことを目標に、秋学期の後半を進めていきたいものです。

なお、一部のテキストは「青空文庫」（http://www.aozora.gr.jp/index.html）を利用しました。この場を借りて、お礼申し上げます。

（文責　岸本廣大）

『歴史入門』（水曜４限）　担当　岸本廣大

秋学期の「歴史入門」では、生徒さんから要望のあった西洋近代史の概説を行っています。高校世界史レヴェルの内容を中心にしながらも、生徒さんの関心に沿ってさらに詳しい解説や議論も挟みつつ、楽しく進めています。その詳細はブログに譲るとして、この「山びこ通信」では、春学期のテーマ「中国の三国時代」の中で話題となった「歴史の見方」を一つ、紹介させていただきます。

中国の三国時代といえば、小説や漫画、ゲームなど様々なメディアを通して、今でも受容されている『三国志演義』を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。生徒さんの関心も、それに由来するものでした。そして、多くの人がご存知の通り、この「演義」はあくまで後代の創作です。その主たる元ネタとなったのが『三国志』、いわゆる「正史」であるということも知られていることです。クラスの議論では、「演義」と「正史」の違いが、よく話題になりました。曹操の残虐性や呉軍の道化としての描写、特に「演義」のハイライトである赤壁の戦いにおける蜀の英雄たちの活躍が、「正史」とは全く異なる点は、議論が大いに盛り上がりました。つまり、「演義」はあくまで史実をもとにした二次創作なのです（そもそも「演義」自体に様々なヴァリエーションがあります）。しかし、ここで私は二次創作としての「演義」を貶めたいのではありません。むしろ注目すべきは、「正史」の方なのです。

中国における「正史」とは、対象となる王朝の滅亡後、後継王朝の下で執筆される歴史書です。例えば、『三国志』は三国が滅亡した後、晋代に執筆されました。それは、晋が帝位を譲り受けた魏を正統王朝とすることで、自らの正統性を明示するプロパガンダでもありました。そうした性格ゆえに、「正史」では後継

王朝の都合の良いことが強調され、逆に都合の悪いことは記されない傾向にあります。つまり、「正史」からして「実際の歴史」と異なるのです。さらに、「正史」を含む様々な資史料から実証的に復元された「実際の歴史」も、あくまで現代の歴史学者による修復であることを忘れてはいけません。

このように見ると、私たちが学ぶ「歴史」というものがいかに不安定なものであるかがわかると思います。しかし、歴史を学ぶことは無意味ではありません。特に「三国志」に引き付けていうならば、重要なのは「実際の歴史」と「正史」や「演義」、そして現代でも生み出される三次創作とでもいうべき作品との差異を認識して初めて、それぞれの作品の独自の歴史解釈や文学表現を本当の意味で理解できることです。「三国志」なら、その理解によってそれぞれの作品をもっと楽しめるでしょう。それ以外の歴史でも、このような歴史の見方によって、どういう意図で歴史が紡がれるのか、隠された本当の主張を見抜くことができるはずです。こう考えると、歴史の理解には単なる暗記よりも、その本質を見抜く力がより必要なのでしょう。皆さんも、こんな歴史の見方に挑戦してみてはいかがですか。

（文責 岸本廣大）

『中1～2年英語の基本』（火曜４限） 担当 岸本廣大

中学一年生と二年生が入り混じるこのクラスでは、各自の課題は別個に取り組みつつ、よく使われる会話表現などは一緒に学んでいます。基本的なクラスの方針や進め方は春学期と変わっていませんが、今号の「山びこ通信」では、秋学期に入って変わったことを紹介していきたいと思います。

まず一つ目は、二年生の単語の確認です。これまでは、毎週クラスの始めに 6、7 個の単語のスペルや意味を確認していましたが、学校でも単語のテストがあったり、多忙な学校生活で十分に復習できないまま単語の確認に取り組んだりと、二年生の生徒さんには負担にしかなっていないようでした。そこで、私の判断から二年生は単語の確認を一旦中断することにしました。その代わり、二年生には毎回英文を和訳してもらっています。この和訳の練習では、教科書や辞書を見ながら解いても構わないため、家庭や学校での復習が直接的には必要ありません。しかし、訳する際にはこれまでの単語の確認や学校で得た単語と文法の知識はもちろん、初見で文がどういう構造になっているかをその場で判断する必要もあります。生徒さんは、以前の単語の確認に比べて解くのに時間がかかり、特に接続詞「when」や不定詞を用いた問題で四苦八苦していました。しかし、これは否が応でも今後取り組まねばならない長文に向けた一歩です。継続することで、きっと生徒さんの力になると考えています。

もう一つ、変わったことは一年生の英語に対する態度です。小学校までの英語では、聞いたまま言われたままに繰り返すことで、感覚的に英語に慣れ親しんでいたかと思いますが、中学校や高校で学ぶ文法では、論理的に英文を理解する必要が出てきます。このクラスでは、春学期から「名詞」や「動詞」、「形容詞」といった言葉を用いた解説を続けてきました。一年生は当初、そうした聞きなれない文法用語が出るたびに思考を停止させ、理解を拒んでいたように見えましたが、最近はそうした反応は影を潜め、逆に自らそうした用語を使い始めるようになりました。例えば、be 動詞や疑問文の問題で、「動詞がおかしくない？」、「動詞の位置が違うのでは？」などの文法用語が含まれたヒントがきっかけで、悩んでいた問題が解けるようにもなってきました。また、ある生徒さんはテストの見直しをした後で、自分は動詞を入れ忘れる間違えが多かったと報告し、同時に「英語が少しはわかってきた」と自信を見せてくれました。教える側としても嬉しい変化です。

この半年、他にもいろいろ変わったこと、変えたことがありました。そこから、生徒さんに合わせて臨機応変に対応できるのが、山の学校の利点だと私は感じた次第です。これからも、良いことは変えず、反省すべき点はどんどん変えて、生徒さんが英語を自らのものにできるように私も努めたいと思います。

（文責 岸本廣大）

『中３英語の基本』（水曜３限） 担当 浅野直樹

中学英語がいよいよ佳境に入ってきました。これまで文法項目別にドリル的な練習を積み重ね、新出単語の暗記に励んできた成果が現れる頃です。そうです、もうまとまった分量の英文を読むことができるのです。ここではこのクラスでの活動内容を報告しながら長文を読むコツなども伝えられたらと思います。

このクラスでは最初の 20～30 分を Dolphin Readers にあてています。この本は指示も含めてすべて英語で書かれています。それでもその未知の英文から情報を得て指示に従って理解を確認することもできています。英語を読むことができるのだという実感を味わってもらえたなら幸いです。

残りの時間では高校入試に見られるような長文読解問題に挑戦することが多かったです。問題を解かなければならないとはいえ、英文から流れのあるストーリーを読み取ることに変わりはありません。本文を読んでいて問題に出くわすたびにその都度問題を解こうとする人をよく見かけますが、話の後のほうを読まないと解けない問題もありますし、行ったり来たりする分だけ時間をロスするので、このやり方はよくないと私は考えます。問題を気にせず通読してあらすじをつかむのが先決です。

通読するメリットはもう一つあります。多少わからない語や文法があっても文脈の力で読み切ることができるのです。文脈の力とは具体的には but などの接続語に着目して内容を推測することです。あるいは背景知識や常識を活用して内容を予測することです。この文脈の力は強力である反面落とし穴でもあります。いくら接続語に着目しても大まかにしか内容を詰められませんし、知識や常識に沿わない内容だと誤読してしまいがちです。やはり単語や文法の正確な知識は重要です。

長文を読む際には時間も大きな要素になります。現実的に試験では制限時間があります。日常生活ではそこまで厳しい制限時間がないにしても人生は有限です。問題を解く上でも日常生活で読書する上でも概要をぱっと把握し、必要に応じて丁寧に読むということができると理想的です。中学校では教科書の本文を全訳するので全訳しないと落ち着かない中学生をたまに見かけます。しかしそのやり方ではどこかで壁に突き当たります。

素早く読むためにも音読をすることを重視しています。音読すると全訳をする暇はありません。英語を英語のまま理解できるようになると英文を読むのが劇的に速くなります。美しい発音をすることにこだわる必要はありませんが、およそ正しい発音ができることも重要です。日本語の中には英語をもとにしたカタカナ語がたくさんあるので、発音することができると意味がわかるということも意外に多いです。

ここまで長文を読む際の心構えを長々と書いてきましたが、「習うより慣れろ」という側面も少なからずあります。中学校を卒業するまでには簡単な英語なら読むことができるという感触が得られるように励みたいです。

（文責　浅野直樹）

『中学・高校英語』（木曜３限）　　担当　浅野直樹

このクラスには中１の生徒と高３の生徒が同居しています。それだからこそ見えてくる事柄もあります。今回はどこで英語が嫌になるかということを考えてみます。

最初に英語が嫌になる可能性の高い時期は中１のこの時期だと思います(小学校で英語が導入されればその時点で好き嫌いが分かれるようになるかもしれません)。中１の最初の試験はアルファベットや簡単な単語などで高得点が続出するのですが、２回目の試験では be 動詞と一般動詞、疑問詞などが織り交ぜられてそう簡単には高得点を取ることができません。わけがわからなくなり始めるのがこの時期なのです。ここで投げ出さずに be 動詞と一般動詞の違い、肯定文・疑問文・否定文の使い分け、Yes-No 疑問文と疑問詞の疑問文との違いなどをクリアすることが非常に大きなポイントです。

それから中学校では助動詞や to 不定詞、現在完了や関係代名詞を習うことになりますが、先ほど述べたところほどの苦労はありません。逆に最初のポイントでつまずくと後はずっと大変です。

高校に入学してからも英語の授業についてはおそらく中学とそれほど違いを感じないでしょう。一般的な高校ではリーディングとグラマー（ライティング）の授業に分かれるものの、そこでやることは中学のときとほとんど変わりありません。英文が長くなり文法が細かくなるだけです。

英語が嫌いになる二つ目の時期は高校卒業時だと私はにらんでいます。といいますのも、高校でしっかり英語を勉強してきても実際の英文はおろか入試問題でもかなり苦戦するからです。高校で真面目に勉強してきた人ほどその衝撃は大きいでしょう。この時期の壁は単に単語や慣用表現の知識量が足りないというだけのことなのですが、それは後から振り返ってみて初めて気づくことです。苦しいながらも英語に触れ続けているといつか視界が開かれます。

（文責　浅野直樹）

『高校英語』（月曜４限）　　担当　百木　漠

先日、S くんの高校の作品展を見に京都市美術館へ行って来ました。ちょうど山下先生たちも来られていたので、一緒に S くんの卒業制作を鑑賞しました。S くんの卒業制作は、象を題材にした日本画でしたが、象の生命観が迫力をもって伝わってきて、とてもいい作品でした。象の絵には普通灰色を使う場合が多いと思いますが、S くんの絵ではオレンジ色が効果的に使われており、それが大きな象の力強い生命力を表して

いてとても素晴らしいなと感じました。象の皮膚のゴツゴツした感じや、細かいシワもよく表現されていて、見事なものだなぁと感心しました。会場でも来場者の注目を集めていたように思います。Sくんは夏休みの間、京都市動物園に通って、暑い中を象のスケッチを繰り返していたそうです。またここ1ヶ月くらいはこの作品にかかりきりだったようで、授業中少しお疲れなときもありました。しかし、高校時代にそれだけ力を入れてひとつの作品を作り上げられるというのはとても素敵なことだと思います。Sくんも最後まで時間が足りなかったと言いつつ、全力を出しきれたので満足そうな表情をしていたのが印象的でした。

英語の授業については、最近は高校の復習に加えて、センター試験対策の問題をたくさん解くようにしています。卒業制作も終わり、これから数ヶ月は大学入試対策に集中、というところでしょう。センター試験までも、気づけばあと約3ヶ月です。センター対策問題の出来具合は、といえば、問題の種類によって出来不出来の差が大きいです。長文問題や短めの文章題などは比較的得意にしている様子。逆に、文法の穴埋め問題や並び替え問題、発音問題などはやや苦手にしているようです。ただ、全体的に英語に対するセンスは確実に付いてきていると感じます。細かい単語や熟語の意味を知らなくとも、おおまかな文章の構造が理解できているので、意味を推測しながら答えを絞り込めるようになってきています。ほとんどその文章の意味がわかっていないのに、直感的に選択肢の中から正しい答えを選んで成功している場合も少なくないです。

逆に言えば、あとは単語や熟語の知識さえ身につければ、もっと正答率は上がるでしょう。現在は、直感となんとなくのセンスで答えを選んでいるために、正答率が偶然に左右されるところがまだまだ大きいです。Sくんは自分でも「繰り返し復習をするのが苦手」と言っていましたが、この3ヶ月だけは腹をくくって、集中して単語を覚えてもらおうと考えています。それさえやっておけば、後々にまで通じる英語の力を身につけることができるでしょう。卒業制作を仕上げたのと同じくらいの集中力で勉強も頑張ってくれるはずと期待しています。

（文責　百木 漠）

『中学数学』（水曜４限）　担当 浅野直樹

中学生になると学校の定期試験のことが気になるでしょう。中学3年生だと高校入試のことが頭にあるでしょう。このクラスでも試験の受け方に話が及ぶことしばしばです。せっかくなのでこの場を利用してまとめてみます。以下では学校の定期試験を念頭に置いて話を進めますが、高校入試でも試験範囲が広いだけで基本的には同じことです。

中学校の定期試験の場合はまず学校での活動を大切にすることです。そもそも試験範囲がわからないと対策がしづらいですし、場合によっては先生が試験に出す問題を教えてくれることもあります。先生がわざわざ出題予告をする問題は重要な問題であることがほとんどなので、しっかりと練習をする価値があるでしょう。小テストや配布される練習問題プリントも同様です。

定期試験の一週間前くらいになると範囲が発表され部活動も縮小して試験期間になります。そのときにする試験勉強は教科書を中心にすべきです。本文をもう一度読んで練習問題を解き直してみるとよいです。節末問題や章末問題も一通り解いておくことをおすすめします。試験範囲が章の途中であっても、習ったところまでの章末問題を解くことはできます。そして理解できないところは放置せずに理解するまで考えることです。わからなければ質問してもらえればいくらでも説明します。

試験当日は体調を整えて集中力を高めます。理科や社会なら一夜漬けがある程度は有効でしょうが、数学は当日の頭のキレが勝負なので前日は早く寝て当日に備えるほうがよいでしょう。少し詰まったらその問題は飛ばしてわかるところから埋めていくのが鉄則です。計算では印字された問題文の数字には手を入れず、余白に計算過程を書いたほうが見直しやすくなります。答えだけを書く試験でどうしても時間が足りなければ最もありそうな答えを勘で書くという粘りを見せることもあってよいでしょう。根拠のある勘は実力の内だと言えます。

そして答案が返却されたら結果に一喜一憂せず間違っていた問題と偶然正解していた問題の見直しを始めます。特に結果が思わしくなかった場合はその理由を分析し、次につなげます。スポーツでもよく言われることですが、練習は本番のように、本番は練習のように行うことが精神面では重要です。

ここで述べたことのほとんどは生徒たちが自主的にしていたことです。結果以前にそのようにして主体的に取り組んでくれていることに拍手を送りたいです。自分で工夫したことは後に残りますし他の分野にも応用可能です。そうした工夫を促進するようなクラスになっていればうれしいです。

（文責 浅野直樹）

『高校数学』（木曜４限）　　担当　浅野直樹

秋学期からは新たに 2 名の受講生を迎えて 3 名のクラスになりました。それでも方針は変わりません。本質に迫って正しく数学をするということです。

一例を挙げますと微分積分なら「微分とは何か」、「積分とは何か」を必ず問いかけます。これは難しい問いですが、まずは図形的意味合い（微分は接線の傾き、積分は面積）を押さえます。そうしておくとひねった問題で道に迷いかけたときにも復帰することができます。

特定の問題について質問を受けたときにもどのように考えたのかを聞くようにしています。どこまで正しくてどこから誤っているかを明らかにします。あるいはどういうひらめきが足りないかを考えます。時間がかかる泥臭いやり方でもよしとします。正しく手順を進めて正解にたどり着くということが大切なのです。もちろん必要に応じて時間を節約できる別のスマートなやり方を探ります。そうこう考えているうちに本当の実力が養われます。

正しく考えることさえできていれば練習をすればするほど数学ができるようになります。逆に言うと、いくら正しく考えていても練習しなければ上達しません。数学は結果の白黒がはっきりするのでそういう意味ではシビアな科目です。暗記に頼らず原理的に考えることができていれば多少忘れることはあっても大きく後退することはないので、プラスを積み重ねるというイメージで勉強していけばよいと思います。

（文責　浅野直樹）

『ロボット工作』中学生（金３限／隔週）　担当　福西亮馬

『ロボット工作のコツは、思い続けること』

ショベルカーのように物を運びたい、輪ゴム鉄砲を取りつけたい、ライントレースをしたい…など、色々な仕様をどれか一つでも実現できた時、その達成感は何にも代えがたいものがあります。それが次のモティベーションにもつながります。

しかし頭ではすぐにできそうだと思っても、実際には様々な現実の壁があります。たとえば輪ゴム鉄砲のトリガーをモーターで引くことを考えたとします。何となくすぐにできそうです。（サーボモーターという種類を使えば本当にすぐできるですが、あいにく高価なので普通の DC（直流）モーターで考えることにします）。

DC モーターは電池につなぐ間、ずっと回転を続けます。しかしトリガーを引くという仕様にはその回転がかえって邪魔になります。トリガーを動かす角度はせいぜい 60° ぐらいで、回転が止まないと、無理な力がかかってたちまちガリガリという不快な音が聞こえて来ます。

そうした経験から、モーターの稼動範囲を制限する必要性にはじめて気付きます。一番ロボットらしい解決はプログラムを工夫することですが、それには条件分岐のための何らかの入力装置が必要となるため、今はまだ難しい課題となります。

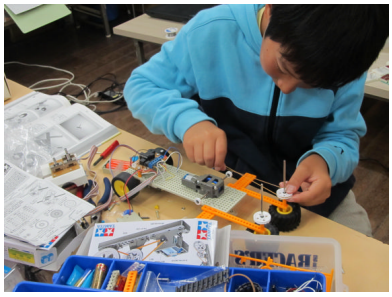
そこで、取りあえず仕様をかなえるためであれば、有線のリモコン操作が一番近道であろうと考え直しました。ただしリモコンを使うと、基板からの制御の必要がなくなるので、自律制御とリモコンとが切り替えできるように配線を新たに工夫しました（いつかこれを無線化したいと考えています）。

さて、リモコンで解決かと思いきや、トリガーを引いた時にも新たな問題が発生しました。トリガーの負荷につられて固定しているはずの銃身が上下し、照準が一定でないという問題でした。そこで、銃身がおじぎをする規則性を把握し、ちょうどゴムの発射のタイミングで真っ直ぐ向くように、取り付け位置を調整しました。それも「他の部品と干渉しない」という条件を満たしてやっと、地面を撃たずに数 m 先の標的まで狙えるようになりました。

このように、頭の中ではうまくいきそうなところに実際的な問題が次々と浮上してきて、それらを一個ずつ解決していかなければなりません。それはなかなか他の人には説明しにくい、ほとんど自分だけに課せられた地道な作業なのですが、それがロボット工作なのだろうと思います。ですので、もしロボット工作にコツがあるとすれば、それはひとえに「あれを可能にしたい！」という思いをどれだけ粘り強く持ち続けられるか、ということなのだろうと思います。不思議なことに、思い続けていると道は見つかるものです。技術的なことはその後から着いて来ることが多いようです。

1 年生の H 君は、「ピンポン玉を取り込む機構を付けたい」と思いつきました。ただ最初は案の定思うようにはいきませんでした。頭の中で「できそうだ」と思った時には、ラダーチェーンという部品を使うことを考えていたのですが、それだとモーターの回転軸が 90 度合わなかったので、軸の向きを簡単に変えられるプーリー（滑

車）にまず変更しました。するとゴムの張力が弱かったり、ピンポン玉を挟むタイヤ同士の間隔が狭すぎたり…と、一つ解決してはまた一つ現れる不具合の謎に悩まされました。



最終的には、軽い玉を取り込むのにそれほど力が必要ないことに気付き、モーターのギア比を一番軽くして回転速度を上げたとたん、一番大きかった原因が解消され、両端のタイヤが勢いよく玉を取り込み始めました。これで見事解決です。またモーターの回転を逆にすることで玉を吐き出すことができ、「サッカーもできそう」と嬉しそうでした。

一方、２年生のＫ君は、夏休みの自由研究にライントレースをするロボットを取り上げたと聞きました。去年もロボット工作のレポートを書き、その時に「ライントレースができることを例に示せたらなお良い」と言われたそうです。それで、２年連続の取り組みとなりました。

夏休みの補講でその話を聞き、ある程度はアドバイスをしたのですが、その後は完全に彼に任せっぱなしでした。それでどうなったかなと思っていたのですが、秋学期の最初の授業で、「ライントレース、できました！」と報告してくれました。一時はコースアウトを繰り返し、どうやってもうまくいかなかったそうです。そこで、基板の半田付けを疑ったり、マイコンの故障を疑って新しいものに取り替えたりと、散々考えてやってみた結果、最後にプログラムに間違いがあることに気付き（一箇所、0 が 1 になっていたそうです）、それを直したところ、たちまちうまくいったとのことでした。

それを聞いて、試行錯誤の大きさと、最後までやり遂げた粘り強さに、「これができたら、さぞ…！」というＫ君の憧れを保持する強さとガッツを感じました。今回の達成感は桁外れの大きな自信となったことだろうと思います。「ライントレース、いいで」とさりげなく他の生徒たちにも勧めているＫ君に頼もしさを感じました。

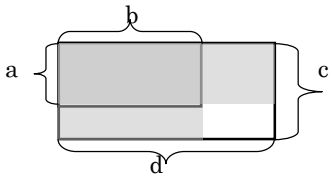
（文責　福西亮馬）

『ユークリッド幾何』中学生（金３限／隔週）　担当　福西亮馬

『私はピラミッドを建てた、という思い出を！』

今学期は、比例や相似をかいつまんで説明した後、ユークリッド『原論』第 5 巻（比例）の命題 16、17 と、第 6 巻（相似）の命題 2、3、5、17、31 の中から数問を選んで証明してもらいました。前学期は奇数偶数や素数の問いを見てきたので、久々に図形に戻ります。まずは道具となる定理を手に入れましょう。

$a : b = c : d \Leftrightarrow ad = bc$



長方形 ab の相似なそれを cd とすると、それらの辺を入れ替えて作った二つの長方形（グレー）ad と bc の面積は等しい。

両端の積が真ん中の積になるという比較的覚えやすい、中学生で習う公式です。ただそれを納得して使えるように、自分たちでもオリジナルに証明してもらいました。代数的に考えると容易なのですが、幾何学的に表すと右の図のような意味を持ちます。

さてそれを道具として、第 5 巻にある命題で腕慣らしをした後、第 6 巻にある相似図形についての定理を証明していきました。今回はその中から代表して、命題 2 に挑戦中の A 君の証明（途中まで）をご紹介します。

A 君はよく見当をつけるために、イメージしやすい特殊な場合で解いた後、だんだんと条件を緩めていき、最終的に一般的な場合を証明するといった手法をとります。今回も、以下のようなステップを踏んでいました。

１）AB＝AC という二等辺三角形

２）AB＝BC、∠B＝90° という（AB＝AC ではない）直角二等辺三角形

３）∠B＝90° という直角三角形（条件 AB＝BC を外す）

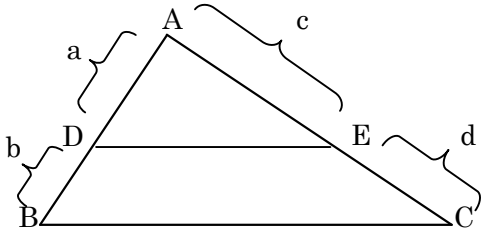
４）任意の三角形

そして A 君は目下４）を考えており、以下は３）までの証明です。
（紙面の都合で概略のみとしています）

第 6 巻命題 2

「三角形の一辺に平行な直線は他の二辺を等しい比に分かつ」

（線分 DE//BC ならば、AD : DB＝AE : EC（a : b＝c : d））



A 君の証明（概略）

1）AB＝AC より、a＝c、b＝d。よって ad＝bc すなわち a：b＝c：d が示せた。

2）点 D から線分 EC に平行な線分を引き、DF とする。

すると EC＝DF＝b、DE＝FC=a。

また AB＝BC＝a＋b より、BF＝BC－FC＝a+b－a＝b。

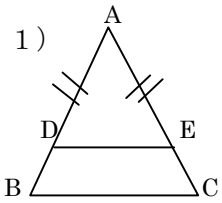
三平方の定理より、$d^2=DF^2=DB^2+BF^2=b^2+b^2=2b^2$。

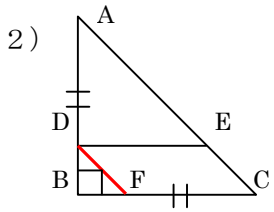
また同様に、$c^2=AE^2=AD^2+DE^2=a^2+a^2=2a^2$。

よって、$(ad)^2=a^2\cdot 2b^2=2a^2b^2$、

$(bc)^2=b^2\cdot 2a^2=2a^2b^2$。

ゆえに、$(ad)^2=(bc)^2$ となり、ad＝bc が示せた。





3）2）と同様に考える。

ただし、△ADE と△DBF は相似なので、DE＝ka、BF＝kb とおける。

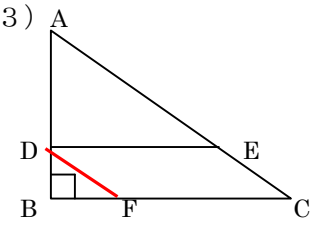
三平方の定理より、$c^2=AE^2=AD^2+DE^2=a^2+k^2a^2=(1+k^2)a^2$、

$d^2=DF^2=DB^2+BF^2=b^2+k^2b^2=(1+k^2)b^2$。

よって、$(ad)^2=a^2\cdot(1+k^2)b^2=(1+k^2)a^2b^2$、

$(bc)^2=b^2\cdot(1+k^2)a^2=(1+k^2)a^2b^2$。

ゆえに、$(ad)^2=(bc)^2$ となり、ad＝bc が示せた。



上の証明で、A 君が直角三角形という特殊な条件を置いたのは、「三平方の定理が使えるかもしれない」というひらめきからでした。（またその定理を使うために引いた補助線が素晴らしいと思います）。

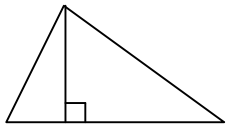
三平方の定理はこのクラスですでに証明済なので、もちろん使ってもよい道具です。ただし一つだけ注意点は、それを使うと 2 乗の計算が多く現れて式が複雑になることです（学校ではまだそれほど習っていないところです）。そこで A 君は $a^2+k^2a^2$ の項が出てきた時に面食らって、自分が間違っているのではないかと思って悩んでいました。しかし後でそれが$(1+k^2)a^2$ と一つにくくれることを見つけました。そして 3）が 2）を k＝1 の場合として含むことに気付き、2）を拡張してくれたのでした。

しかし、そのような一歩ずつの A 君の証明を見て、ある方は、次のようなもっとシンプルな方法を提示されるかもしれません。

a：a＋b＝c：c＋d ⇔ （a＋b）・c＝a・（c＋d） ⇔ ac＋bc＝ac＋ad ⇔ bc＝ad ⇔ a：b＝c：d（Q.E.D.）と。

これに対し A 君は、まだ命題 6.2 の完全な証明（Q.E.D.）には至っていません。そこで次のような疑いがもたげて来るかもしれません――もしかしたら任意の三角形の場合には通用しない方法にこだわっているのではないか、と。さてここで、A 君には今すぐ三平方の定理を使うことをやめて、スマートな方法に乗り換えた方がいいと勧めたものでしょうか。

私の答は、もちろん「No」です。A 君の取った道はまだ先をたどることができます。たとえば、任意の三角形は 2 つの直角三角形に分割できることに着目すれば、三平方の定理を「2 回」使うことで、3）はさらに拡張できます。もし A 君がそれを思いついたなら、「任意の三角形の場合の三平方の定理」という、新たな収穫が得られることでしょう（それも高校で余弦定理を習う以前に！）。


任意の三角形は 2 つの直角三角形に分割できる。

このように、ある定理を証明しようとして有益な副産物が得られることは、実際に数学そのものの発展してきた道でもあります。それは、『フェルマー予想』など未解決問題の歴史を見てもうなずけます。ですので、A 君が一般の三角形の場合の考察を終えて Q.E.D.と書き込んだ時、それは A 君にとって「私はピラミッドを建てた」とも言える経験になることでしょう。

（なおフェルマー予想は、n=4 の場合、n=3 の場合、14、7、100 以下の素数…と次第に包囲されて、とうとう解決に至ったわけですが、そのように特殊な条件を置くことはプロの数学者も使う常套手段です。そして A 君も何ら変わないと感じました。）

そして私が、未完成にも関わらず、なぜ A 君の上の証明を紹介したかと言いますと、それは A 君の一歩一歩の手順が、「帰納的」だからです。もし私がスマートな方法を見せ、A 君がそれを書き写して何か自信を得てくれたとしても、おそらくその自信はまたどこかで揺らいでしまうでしょう。一方、今ある数学は「彼が言った」（Dixit）ではなく「私が言った」（Dixi）の積み重ねによるものです。その数学そのものがたどってきた道のりを、自分の足でリアルに知的に進んでいる A 君に、どうして「遠回りだ」などと言うことができるでしょうか。むしろそれが「王道」なのです。曲がりくねり、自分で歩いた部分こそが。

さて、私たちが『原論』を今も昔と変わらずに読むことができるのは、「A＞B、B＞C、ゆえに A＞C」といった論理が普遍性を保っているからですが、この論理的構造は、いわゆる無形の金字塔です。それは古いから立派なのではなく、それ自身の生命力で立っていればこそです。実際、これほど長生きであるものに着手することに、どうして私たちは躊躇しなければならないことがあるでしょうか！ ぜひ一緒に自分自身の手による証明を残し、有意義なピラミッド「群」を建てようではありませんか。Ergo, Exigamus！

（文責 福西亮馬）

『将棋道場』（月曜 16:00～18:00）　　担当 百木 漠

将棋道場は始まってから１年半が経ちましたが、おかげさまで相変わらず盛況です。ただ、最近は同じ子供たちがずっと来続けてくれるというよりは、毎回新しい子供たちが来てくれて、どんどん入れ替わっていくような印象をもっています。小学１・２年生でも友達につられて、一度は将棋を指してみようと思ってくれるのでしょうか。その結果として、一度だけで満足して来なくなってしまう子供もいますし、その後も続けてずっと通ってくれる子供もいます。

現メンバーでいうと、将棋道場が始まってからずっと通い続けてくれているのは Ka くんだけです。おかげで Ka くんはずいぶんと将棋が強くなりました。学校の友だちなどにはそうそう負けないでしょう。将棋のセンスも良いです。ただ、３級の壁をなかなか破れないようで、ここからもう一段階レベルを上げるのには努力が必要かもしれません。Ko くんや Mi くんなどもよく来てくれています。とくに Mi くんは最近やる気に満ちているようで、自分の腕前に自信もついてきたようです。先日、服部さんとの駒落ちで昇級に挑戦して残念ながら敗れていましたが、次の級に上がる日もそう遠くないでしょう。好きこそ物の上手なれという通り、難しい定跡などを習わずとも、熱心に通い続けていると自然と将棋は強くなってくるものです。元気がありすぎて、対局中についつい声が大きくなってしまうのが玉にキズですが（笑）、上級者の落ち着いた風格もこれから身につけていってほしいなと思っています。

Ko ちゃんや、M.Yu ちゃん、N.Yu ちゃんなども最近は続けて通ってくれています。女の子のなかには、将棋の１局が長いのに飽きてしまって途中でやめてしまう子も多いのですが、彼女たちは１時間を超えるような長い勝負でも、じっと根気強く将棋盤のまえに座って最後まで指し続けてくれます。これはとても偉いことだと思います。男女に限らず、低学年の子供たちはずっと将棋盤のまえに座って自分の手を考え続け、相手の手をじっと待っているだけでも、かなりの忍耐力がいるものです。こういう状況に飽きてしまう子が多いのも確かですが、概して女の子は男の子よりも集中力と忍耐力が強いもの。彼女たちはまだ将棋を始めてからあまり時間は経っていませんが、毎回確実に強くなっていますし、将棋を指す態度も模範的です。いつも頼もしく思いながら、彼女たちの熱戦を見守っています。

前回のトーナメント大会で優勝した Ri くんは、相変わらず絶好調です。Ri くんも一ヶ月ごとに確実に強くなっていて、そのうち僕たち大人も平手で負かされてしまいそうな勢いです。実際に山の学校以外にも、いろんな将棋クラブなどに出入りして大人たちと将棋を指しているらしく、僕もいつ追いつかれるかと戦々恐々としています（笑）。Ri くんにも、Mi くんと同じく、これからは将棋の強さだけでなく、上級者としての落ち着いた振る舞いも身につけていってもらえれば、と思っています。

以上のように、将棋道場は初心者から中上級者まで、いろんなレベルの子供たちが一緒になってわいわいと将棋を指しています。将棋の上手い下手にかかわらず、誰でも歓迎しますので、興味ある方はぜひ一度ご参加ください。お待ちしています。

（文責 百木 漠）

『ひねもす道場』（月曜 16:00～18:00）　担当　福西亮馬

落ち葉の景色が記憶があるので、確かあれは秋から冬にかけての出来事だったと思います。私がまだ小学生の頃の話です。

当時、私は伏見の方に住んでおり、小学校の裏手に藤森神社という格好の遊び場がありました。そしてそこでは、時折、子供たちのための無料の催しがありました。近所のおじさんたちや裏手にある教育大の人たちが企画してくれていたのだと思います。参道の木陰にいくつかテントが張られ、それぞれのブースで、竹とんぼや、ブンブンゴマ、二本の糸を両手で交互によじ登る人形など、大人たちが材料を持ち寄って竹や木を使ったおもちゃの作り方を教えてくれていました。

錐で穴を開けたり、のこぎりを引いたり、「あぶないからのいておき」と言う大人たちの手つきを、「自分たちのために何かをしてくれているんだ」という期待の目で見つめていました。

その時、自分では何を作ったのかはもう忘れてしまいましたが、今でもかすかに憶えているのは、薄暗くなって一個ずつ片付けられていくテントの端で最後まで粘っていたことと、「こんなことがいつもあったらいいのになあ…」と胸の奥で反芻していたことでした。ちょうど宝の山に出会って帰るに帰れなくなった、シンドバッドのような気持ちだったのかもしれません。

もしかしたらそれは、毎年その時期になると開かれていた催しだったのかもしれません。しかし私自身の出来事としてはそれっきり、一期一会のことだったと思います。「ぼん（坊）」と言って面倒を見てくれたブースの人の顔を、当然すっかり忘れてしまいました。しかしそれでも、あの時に戻ってもしその人の顔が分かるとすれば、当時のことが貴重な経験として胸に残り続けていることを、伝えたいものだと思っています。

さて「ひねもす道場」が、いよいよ次で 20 回目を数えるようになりました。毎回別の手ごたえがあり、次は何をしようかと考えることは、私自身も楽しみです。また常連の子供たちがだんだん技を磨いていってくれることも嬉しいです。いつもあっという間に時間がすぎてしまいます。

そうして片付けの時間になり、ふと時折思い出されるのが、上に書いたような記憶の端々です。あくまで個人的な述懐ですが、もしこうしたイベントを何のためにしているのかと問われたら、おそらくそれは、「こんなことがいつもあったら…」と、言葉に出さずに感じていた自分の気持ちを、今でこそ代弁したいという思いがどこかで原点になっているからなのだろうと思います。

オリジナリティを存分に発揮して、満足げな K 君。（第 16 回）

マジックハンド、6 段バージョン完成！目標は、頑丈に作ること。（第 15 回）

ロケット作りはすごく手間がかかりました。でもできたのはカッコよかった！（第 18 回）

マジックハンドの応用で、リンク機構のおもちゃを作りました。(第 16 回)

ひねもすでゴム鉄砲作り。ライフルは性能抜群。連射もできて至極ご満悦。（第 17 回）

剣作り。三銃士ならぬ十銃士？　次回も作りに来て下さい！（第 19 回）

ですので、そのようなイベントを続けることができて、とてもありがたく感じています。それは参加してくれているみなさんのおかげです。次回もぜひ遊びに来てくれたら嬉しいです。

（文責　福西亮馬）

『経済学入門』（水曜 4:00～5:20）　担当　百木 漠

経済学入門の授業は、秋学期から新たにＩさんが生徒として加わりました。その結果、Ｕさん、Ｋさん、Ｉさんの３名プラス僕で授業をしています。議論仲間が増え、授業内容もいっそう盛り上がりをみせています。単発でもよいので、一度参加してみたという方はぜひお気軽にご連絡ください。専門知識がなくても、経済に少しでも興味があれば歓迎です。先日は、昨年度まで山の学校で教えられていた小林さんにゲストに来てもらい、議論が盛り上がりました。この授業は僕が一方的に授業をするというよりは、初めだけ僕が簡単な解説をして、後半は皆で自由にディスカッションをするというスタイルを取っています。実際の経済の動きについては、いつも本を読んで勉強している僕よりも、社会のなかで様々な経験をしてこられた生徒の皆さんのほうがいろいろと有益な知識を持っておられることが多いです。しかも生徒さん３名ともそれぞれに職業や人生経験が異なるので、幅広い意見や情報が聞けて、こちらも非常に勉強になります。

秋学期の授業では、これまでどおり一週間の経済ニュースをチェック＆解説しつつ、佐伯啓思『大転換　－脱成長社会へ』（2009 年、NTT 出版）を輪読しています。佐伯啓思先生は、僕が所属する京都大学人間・環境学研究科の教授で、僕も普段からお世話になっている先生です。この本は、リーマン・ショックの約半年後に出版されたもので、サブプライムローン問題に端を発する金融危機を、80 年代以降の新自由主義政策の危機、さらには近代文明の危機として捉える視点から書かれています。狭い意味の経済学に閉じこもらず、政治、社会、文化、思想、哲学などの領域にまで考察の範囲を広げつつ、飽くなき成長を前提とした「経済」のあり方を問い直し、「ポスト成長後の社会」を構想するという内容になっています。生徒さんから「経済学の専門的な知識よりも、幅広く現代の経済をみる視点を身につけたい」というリクエストがあったので、（僕の専門である）経済思想系の本を選んでみました。

最近の世界経済は、急激な円高ドル安の進行、ギリシアの財政危機に伴うユーロ安、震災・原発事故にともなう日本経済のさらなる停滞、などなどの不安定要素が重なって、全体的に停滞モードです。最も成長している中国経済でさえ、インフレの進行、所得格差の拡大などが懸念材料となって、やや成長スピードが落ちてきました。財政危機や高失業率などに悩む先進諸国の間で、リーマン・ショック級の金融危機が再び起こる可能性も否定できないような状況にあります。そのような状況のなかで、改めてサブプライムローン危機が我々に投げかけた問題を考えなおすことは、なかなか意義深いことであるようにも思います。また、この本では経済問題だけでなく、近代文明の技術主義や合理主義にも疑問を投げかけるような内容となっていて、原発事故にまつわる科学技術や専門知識のあり方を問い直す意味でも輪読する価値があると感じました。

今後も生徒さんたちと議論を活発に交わしつつ、これからの日本経済や世界経済のあり方について考えを深めていければと思っています。

（文責　百木 漠）

『漢文入門』（月曜 5:10～6:30）　担当　木村亮太

早いもので、秋学期がはじまって一ヶ月半が過ぎました。

受講生のお二人は、毎週、しっかりと予習をして教室に来られますので、その時点でほとんどの文の意味は理解しておられます。また、たとえ意味が取りにくいところに出会っても、ヒントになることをすこし聞いただけで、「あっ！」とすぐに正しい方向に進まれますので、そんなときにはとても頼もしく感じます。

漢文も外国語ですから、見たままの文章をそのまま理解するのは難しく、どうしても予習が欠かせません。ひとりで学習するときの強い味方になるのは、やっぱり辞書です。

前任の村田先生が受講生のお二人に推薦しておられた『全訳　漢辞海』（三省堂）という辞書は、私も大学で漢文の勉強を始めたころから愛用しています。通学の際、自転車の前カゴにそのまま放り込んで持ち運んでいましたので、紙箱はぼろぼろになってしまいましたが、いまにして思えば、それだけ家でも学校でもよく使っていたということかも知れません。

私が使いはじめたのは初版が出て間もないころでしたが、その後、第二、第三と版を重ねており、いまもっとも支持されている漢和辞典と言えそうです。

現に、大学で授業に出ておりますと、ほとんどの学生がこの辞書を持参してきます。彼らの多くは第二版を使っているようですが、まだ専攻が分かれたばかりの三回生の某君はピカピカの第三版を持っていました。「隔世の感があります」などと書くと笑われるでしょうが、ひとまわりも年の違う学生と席を並べていれば、どうしても保護者のような気持ちになります。

また、同じ研究室に所属している中国人留学生・X さんの『漢辞海』を見たときには驚きました。本を閉じて、縦置きしたときの上の部分のことを「天」と呼びますが、彼女の『漢辞海』の「天」は付箋紙に書かれた文字でびっしりと埋め尽くされていたのです。それらはどれも、普段からよく参照するページに貼られたものでした。X さんは訓読を始めてまだ二年目とのことですが、道理であれだけ上手に読めるはずだと納得したものです。

大学院で研究をするとなると、どうしても日本の漢和辞典一冊だけでは不足を感じてしまうのですが、いまでも訓読の仕方を確認するときによく使っています。うれしいのは、山の学校で漢文クラスを担当するようになって、その回数がまた増えたことです。というのも、受講生のお二人も『漢辞海』を使っておられるので、授業の際に「この字は引いてみましたか？」、「なんと説明してありましたか？」と質問すると、お二人も「こうこうとありました」と答えてくださるからなのです。

入門クラスでは、『漢辞海』の手に負えないような表現はあまり登場しないとは思いますが、いつかは『漢辞海』の能力にも限界を感じるときがあるかも知れません。しかし、どのような辞書にも必ず得手不得手はあるものです。それをその辞書の個性として理解すれば、もっと上手に使いこなせるようになります。また、ほかの辞書と助け合うことで、より深い理解へとつながっていくのです。

いつか『漢辞海』を使いこなしているという感覚が得られるまで、まずはとにかく、いやがらずに引きつづけてもらいたいと思います。

（文責　木村亮太）

『イタリア語講読』（月曜 18:40～20:00）　担当　柱本元彦

今学期のテクストはルチャーノ・デ・クレシェンツォのものを選びました。すでに邦訳もいくつかある作家で、やさしく読める哲学史などが有名です。デ・クレシェンツォは、「やりくり上手で機智に富む」ナポリ人のなかのナポリ人、その典型として通っています。でも、ナポリで生まれたがゆえに傷ついて屈折した知識人の多いなか、あっけらかんとして健康的にわらう彼は、実際のところ滅多にいない特殊なタイプとも言えます。とりわけ自伝的なむかし語りが魅力的で、ユーモラスな言葉のなかに、かつてのナポリがしみじみとした黄昏の光に照らされて浮かび上がります。うちとけた会話的な文章には、ところどころナポリ方言も使われていますが、気になるほどではありません。いくらか困難な箇所を括弧入れして、ずんずん読み進むことができるでしょう。

何年も前にデ・クレシェンツォに教わったとぼくが記憶している（記憶違いかもしれませんが）＜うがった言葉＞をひとつ紹介しましょう。ソクラテスは石工だったし、イエスは大工だった（父親のヨセフが大工なのは知られていますから、きっとイエスも若い頃は一緒に働いていただろうと考えて）…というものです。すこし説明すると、要するに、＜あちら＞では、日本とはちがい、石で家をつくります。つまり家を建てるのは大工ではなく石工なのです。石工が＜外側＞の壁をつくります。そして大工が、木を加工して家の＜内側＞を整えるわけです。二人そろって家が完成する…「ヨーロッパ人の精神はギリシア文化とキリスト教でできている」と言えば教科書的な紋切型ですが、こんな＜うがった言葉＞で語られると、はたとひざを打って納得、感心するしかありませんね。

（文責　柱本元彦）

『フランス語講読』（日曜 9:10～12:00 隔週）　担当　武田宙也（ひろなり）

この秋から始まった「フランス語講読」のクラスでは、フランスの美術史家ダニエル・アラス［Daniel Arasse, 1944–2003］によるユニークな絵画入門書、『絵画のはなし［*Histoires de peintures*］』を読んでいます。この本は、2003 年に世を去った著者が、その年の夏に出演したラジオ・シリーズの計 25 回の放送を書籍化したもので、イタリア・ルネサンスを専門としたこの魅力的な美術史家の生前最後の声を収めています。

アラスは本書の中でアナクロニズムというトピックに言及し、それが今日の美術史を考察する上でいかに本質的なものであるか語っています。アナクロニズムとは、日本語で「時代錯誤」などとも訳される言葉で、

歴史について考える際に、異なった時代に属するものを混同してしまうことを指します。それは、単純な歴史的事実の誤りから、ある時代以降に現れた概念を用いてそれ以前の歴史を解釈するといったことまで、多岐にわたります。たとえば、前者であれば、紫式部を室町時代の人間だと考えることが、後者であれば、明治以降につくられた行政の仕組みを江戸時代の政治を考える際にそのまま適用してしまうことがそれに当たるでしょう。

これらの誤りを周到にしりぞけることは歴史家の第一の務めですし、もちろんアラスも、アナクロニズムはできるだけ避けられるべきだと考えます。しかし一方で彼は、こと美術史においては、それが完全には避けきれるものでないことも認めるべきだと言います。というのも、美術史の研究対象となる芸術作品は、そもそもそれ自体が「さまざまな時間の混交」からなるものだからです。すなわちそれは、「現在それが存在しているところの時代」、「それがつくられた時代」、そして「この二つの時代のあいだに流れる時間」という三つの時間を自らの内に含み込むことによって、特定の時代性から常に逸脱する存在となっているのです。そしてまた、逆説的にもこのことこそが、過去につくられた芸術作品を現代のわれわれが観賞する際の醍醐味を生みだすことにも繋がっています。したがって、今日の美術史家にとってアナクロニズムの問題とは、それを完全に排することというよりも、それといかに上手に付き合い、利用するのかという側面に関わってくるでしょう。

本書、『絵画のはなし［*Histoires de peintures*］』においては、こうしたアナクロニズムとの戯れから生みだされた著者一流の絵画の味わい方がそこかしこで披露されています。アラスは、一見とるにたらない細部への注目から出発して、さまざまな絵画を新たに楽しむことへと読者を誘ってくれるのです。本書のタイトルに使われている「イストワール［histoire］」という単語には、英語のストーリー（はなし）に当たる意味のほかに、ヒストリー（歴史）の意味もあるのですが、まさに本書は、「複数の歴史（の可能性）」に捧げられた「時代錯誤」の絵画入門書ということができるでしょう。

（文責　武田宙也）

『英語一般』（木曜 14:10～15:30）　担当 浅野直樹

夏休み明けの秋学期当初こそ英語の勘がいくらか鈍っていましたが、最近では安定して英語の読み書きや会話でのやり取りができています。基礎が十分固まっているのであとはひたすら単語や語法になじむことです。

さて、英語がある程度理解できるようになると、日本語とはそもそもの発想が違うことを意識させられます。受講生の方がそうした気づきを何度か指摘されました。このクラスで感じた英語と日本語との発想の違いをいくつか紹介します。

和文英訳をするときにその違いに最も悩まされます。直訳でも十分意味が通る英語になることもあれば、直訳では意味が通じないこともあり、そもそも直訳が不可能な場合もあります。日本語では主語が明示されていないこともしばしばですが、英語では原則として主語が必要です。その他にも「世間では…」という日本語を"... in the world"と訳すのは明らかに変ですし、「～してもらう」という表現を日本語ではよく用いますが、それにぴったり当てはまる英語の表現はありません。

英語を読む場合はいわゆる無生物主語を含む名詞の多さにいくらか戸惑いはしますが、内容をつかんだり自然な日本語にしたりするのに英語を書くときほどは苦労しません。それよりも内容や冗談に文化差を感じます。今はこのクラスで"Dog Days (Diary of a Wimpy Kid, Book 4)"というまさに現代アメリカ的な本を読み進めています。主人公がスムージーを友人のおじさんのツケで食べていたことが発覚して揉めたときに、主人公の母親は息子をかばうことなく「クリエイティブになれ」と言い、主人公は芝刈りサービスを始めるといったくだりはどこをとってもアメリカ的です。冗談らしき箇所のおもしろさがわからないこともしばしばあります。この話とは別の文脈でしたが、携帯電話でのテキストメッセージで使われる省略語（U R＝You are、l8＝late など）の意味がわからず苦労するという場面もありました。

会話では"You"と言うときに抵抗を感じるという話で意気投合しました。英語の構造上"You"と言わなければ話が始まりませんが、これは失礼な言い方ではないかという疑念に駆られるのです。敬語や主語をぼかす表現が英語ではほとんどできないために戸惑うのでしょう。

言語の違いや文化差を感じるのはかなり英語ができるようになってからのことです。こうした感想が聞けたのは進歩の証拠だと受け止めています。

（文責　浅野直樹）

『ラテン語初級講読A』（水曜４限）　　担当　山下大吾

今学期の当クラスでは、キケローの『国家について』からの一節である『スキーピオーの夢』を読み進めています。受講生はこのクラス開講以来継続受講されているお二方です。短いものですので、お二方の進展したラテン語読解力を鑑み、今学期中の読了を目指しております。来学期からはキケローの代表的な弁論である『カティリーナ弾劾』に取り組む予定です。

上述したように作品の規模としては小品に属するものでしょうが、その内容は壮大なもので、21 世紀に生きる我々の想像力を遥かに凌駕する迫力で展開していきます。夢の中で祖父である大スキーピオーや父パウルスに出会った小スキーピオーは、いつしか自らが地球を離れ天界の果てにいることに気付きます。そこから見る地球の何と小さなこと！ 地球には魂を除いて死すべきもの崩れ落ちるものしか存在しません。従ってこの世界観は、同じ天動説に立脚しながらも、後に地動説を唱えるガリレオを異端審問で追い詰めたような、地球を天界の主人とするキリスト教神学のドグマとは全く異なるものであることが認められます。

ストア派の教えが濃厚な天上の世界には、神によって定められた、そこに至るまでの地上の義務を果たさなければ到達できないと父パウルスが息子に語りかけます。地上の生命は、決して他ならぬストア派の人々が考えたようなἀδιάφορον「取るに足らないもの」ではないというキケローの信念の顕れと見てよいでしょう。

天界の叙述は、上述のように当時一般的な見解であった天動説に基づいていますが、ピタゴラス派の影響を受け、星々の動きに妙なる音楽の調べが織り込まれるなど、哲学的主題を背景にしつつも実に美しく鮮やかで「文学的」です。このような文学的想像力が一体どこから生まれてきたのか、読み進めながら時折不思議な感覚に襲われるほどです。もっとも本来の夜空には、キケローならずとも人間にこれだけの想像力を働かせる力が宿っているはずで、「光害」に毒された今日の我々の環境の方が異常なのかもしれません。

哲学的なテーマや術語が多く現れるため、参考書として波多野精一の『西洋哲学史要』を用いています。明治 34 年（1901 年）刊行という一世紀以上前の本でありながら、文語体であることを除けば現在でもこの書を越える同内容の概説書はないと言われるほどの名著で、今回改めてそのことを認識するに至りました。波多野がこの書を著したのは満 24 歳の時。一回り以上年上になってしまった我が身を省みて、またもや何やら不思議な感覚に襲われます。

（文責　山下大吾）

『ラテン語初級講読 B』（木曜 2:10～3:30）　担当　山下大吾

今学期の当クラスは前学期に引き続いてキケローの哲学的対話篇『老年について』を読み進めております。受講生は継続受講下さる C さんお一方、昼下がりの離れの間で、キケローの記したラテン語を根気強く、一語一語噛みしめながらの授業を行っております。

教材として用いている版は、『西洋哲学史要』と同じく一世紀以上前に刊行されたもののリプリントですが、テクストには付録の註釈に加え、問題となる文法事項に関して、主要な文法書の参照箇所が脚註で事細かに指示されています。初級者対象とは言え、いやだからこそ一切手を抜かない、古典学の教育の面での厚みを感じさせる頼もしく心強い脚註です。その頼もしさに頼りつつ最近の註釈にも目を配りながら、邦訳なども参照して読み進めております。残念ながら語彙集が欠けておりましたので、他の版のものをコピーして使用しています。

Qui omnia bona a se ipsi petunt「自分で自分の中から善きものを残らず探し出す人」―理想的人物像を簡潔に言い表した、大カトーがそのような人物は老年にこそ求められるべきものと述べる 4 節のこの言葉は、当時のストア派が理想とした αὐτάρκεια「自主自立」の思想はもちろんのこと、プラトーンなどにもその淵源が求められるものでありましょう。同時にここには、絶対的存在者―「神」―に善きもの、あるいは「救い」を求めることのない、健全な humanitas の精神をも認めることができるでしょうか。

「哲学（philosophia）というものは、それに従って生きるならば一生を煩いなしに過ごせますので、どれだけ賞賛しても十分ということはありません」―明日の命も危うい状況の中、キケローはこの対話篇の序にこのような言葉を記しています。それを読む我々には、そのラテン語の意味を正確に把握し、歴史的思想的背景を含め全体的な理解を可能にするため、できるだけ冷静な頭脳が要求されることは言うまでもありません。特に「研究」という段階になると、とかく客観的な思考が大事だと金科玉条のように叫ばれるものです。

しかしながら我々が取り組んでいるのは、philosophia あるいは philologia という「学問」です。それを支えているものは、文字通り主体的な、自身の胸底から湧き上がり、叡智や理性を求めて止まないという二心なき「愛」に他ならず、キケロー自身もこの愛を抱き続けたからこそこの対話篇を始め幾多の作品を著し、またその愛に後世の人々が心を打たれたからこそ彼の作品が現代まで伝えられていることは言を俟ちません。古典古代より絶えることなく受け継がれてきた精神的な力を自らの内に再確認しつつ、受講生の方と共に毎週キケローの言葉を読み進めております。

（文責　山下大吾）

『ラテン語初級講読Ｃ』（金曜４限）　　担当　前川　裕（ゆたか）

このクラスでは、セネカ「ルキリウスへの手紙（倫理書簡集）」を継続して読んでいます。今学期は第 36 書簡から始まりました。最初から始めて、ところどころ飛ばしながらですが、順に読んでいます。お二人の受講生と、文法事項を確認しつつ、またすでに何度も出てきたセネカの概念について意見交換をしながら読み進めています。お二人とも遠方から来られていますが、毎週、予習の上で通われるその熱意には頭が下がります。

セネカの基本的主張は、世の瑣事からは引き下がって関わらず、魂を平静に保つことが大切である、と言う点です。またそのための修養を、比較的若い世代から始めることを推奨しています。第 36 書簡では、「若い時に備えをし、年をとった時に利用すべきである」という言葉も出てきます。人は年をとってから、「若い時にああすればよかった」と嘆きをもって振り返るものですが、このようなセネカの言葉こそ、今の若い人たちにも味わってほしいものだと思います。

一回分 16 行程度を 1 時間弱で読みますので、余った授業時間については、おまけの話をしています。古代の写本がどのようなものであるかという紹介や本文校訂の方法、またネット上に公開されている写本を読んでみる、といったことも試みています。現在の印刷されたテキストからは伺えない古代の本文事情についても、知っておくのが望ましい知識だと思われます。

次学期も引き続きセネカの予定です。初級講読は、初級文法修了程度(独学でも構いません)でご参加でき、参加者に合わせた進度を取りますので、興味を持たれた方はぜひご連絡ください。

（文責　前川 裕）

『山の学校古典語クラスについて』

古典には人間の英知が詰まっています。汲めども尽きぬ知恵の泉に喩えることができます。誰にでも分け隔てなく開かれている泉です。ただ、川の流れのように多くの人の目にもとまる場所にはなく、少し山の奥に分け入らないと見つかりません。はじめて出かける場合は、道案内や道連れがいたほうが心強く、また道中の会話もはずみます。

この道案内をするのが山の学校の古典語クラスです。

大別すると、古文と漢文、ギリシャ語とラテン語の四つのコースに分けられます。いずれも高校生以上が対象です。古文と漢文は、学校で文法を習ったきり細かいことは忘れた…という方もご安心ください。名所を駆け足で巡るツアー型の授業ではありません。一人一人のペースにあわせてごじっくり丁寧にご指導いたします（それぞれのクラスの定員は 5 名）。

ギリシャ語とラテン語は興味はあるが初めて…という方も、尻込みする理由はまったくありません。英語を学んだ人は、これらの言語の基礎にあたる文法の考え方は履修済みとみなせます。たとえば、「三人称単数のときは s をつける」と習いますが、あれはギリシャ語、ラテン語の文法知識と同じです。だから中学生には難しいのですが、大人にはパズルのように楽しめます。

ある程度文法の基礎がわかったら、めでたく古典の泉にたどり着いたことになります。ここまでくればあとは自分で読むだけです。最初はちょっと気後れするという人や、文法は履修済みだけれど、読解のコツが今ひとつつかめないので、それを直伝して欲しいという人。ニーズはいろいろあろうかと思います。現在、山の学校では短い文章をゆっくり読みながら文法の復習をするクラスから、大学の講読に近い内容のクラスまで、様々なご希望に合わせた講読クラスをご用意しています。

今回の山びこ通信では開講クラスのいくつかについて、担当講師の紹介文を掲載させていただきました。ご関心をお持ちの方は、いつでも山の学校までお尋ねください。

『ギリシャ語、ラテン語冬期講習のご案内』

冬休み期間を利用し、ギリシャ語、ラテン語の短期集中講座を計画しています（定員 5 名）。日程等細かいことは未定ですが、ギリシャ語は 1 日 3 時間の授業を 4 日、ラテン語は 2 日予定しています。ギリシャ語はプラトンの『クリトン』か『イオン』、ラテン語はセネカの『道徳書簡集』を読むつもりです。この山びこ通信がお手元に届く頃には詳細が決まっていますので、ご関心をお持ちの方は、ご遠慮なく山の学校までお問い合わせください。

（山の学校代表・山下太郎）

山びこ通信
2011 秋 学期号
平成23年11月11日発行

学校法人 山の学校

講演・ディスカッション

入場無料

第 23 回

ラテン語の夕べ

Lingua Latina

ラテン語学習 最前線

～何で学ぶか、何を学ぶか ～

「ラテン語を学習するための素材や環境は、
さまざまな発達を遂げています。
ラテン語をめぐる最新の状況や、ラテン語学の
ためのさまざまな教材などをご紹介します。

Omnes viae Linguam Latinam ducunt!
（全ての道は、ラテン語に通ず！）

2011
11月25日（金）
18：30～20：00

ラテン語に関心のある方なら
どなたもご参加いただけます。

於 北白川幼稚園第三園舎

講師：前川 裕（山の学校古典語講師）

参加ご希望の方は、電話、FAX、電子メールにて
お申し込みをお願い致します。

＊ 会場が不明な場合はお気軽にお電話下さい。
北白川別当町交差点を東に入り１筋目を北に、
２筋目を東に直進して頂くと、左前（北東）の
山手に石段のぼり口がございます。
市バス5系統「北白川別当町」より徒歩15分
市バス3系統「上池田町」より徒歩10分

ラテン語とは･･･

ラテン語は、古代ローマ世界で使われていた言葉です。西洋世界を中心に広まり、各地方の現地語と融合しながら発達し、その果てに現代のイタリア語やスペイン語、フランス語、ポルトガル語、ルーマニア語が生まれました。英語やドイツ語にも影響が及んでおり、英語の語彙においては実に４５％がラテン語系です。

医学や動物・植物学、天文学など、様々な学術用語の中にも、ラテン語は息づいており、ローマン・カトリック教会においては今日でも公用語として用いられています。

――本誌を手にとって下さった方へ

山の学校は、**小学生から大人を対象**とした**新しい学びの場**です。“**Disce libens.**（**楽しく学べ**）”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は６月、秋学期は１１月、冬学期は２月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない！もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで
TEL: 075-781-3215
FAX: 075-781-6073
E-mail: taro@kitashirakawa.jp
http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

発行元 学校法人北白川学園 北白川幼稚園・山の学校
TAKE FREE